

に即して真なる故に、彌陀より融して之を見るときは西方の無量明の當體即ち彌陀の方便法身である、例せば觀經の六十萬億の化身に即して盡十方無碍光如來となるが如きものである、故に高祖は斷章取義して本願如是の彌陀に合して大行の引證としたまふたのである。

問 無量明と彌陀と化即真といふこと未だ明ならず又十方佛を彌陀の化身とする時は化即真は西方の無量明のみに局らざるべし如何。

答 石泉は一に方處似たるが故に、二に名號似たるが故に、三に光明似たるが故に、仍て十佛の中で殊に西方無量明を以て彌陀の化用ともし又化即真と立るのであると、

問 何を以て其義を知るや、

答 讀易行品に彌陀と無量明とは同佛である、なせなれば寶月童子所問經に稱名易行を明すに何ぞ彌陀の稱名を漏さざるの理あらん、故に行卷では此一佛を擧げて大行を證したまふたのであると、

此意を以て思ふに、釋尊はもとより龍樹の本意も彌陀の稱名易行の外はない、故に幸に寶月童子の願によりて彌陀の本願易行を説くと欲すれども、如何せん機未熟のゆへに、唯現生不退に目をかけて未だ淨土に心よせず、故に直ちに念佛往生の願意を説くこと能はず、止を得ずして暫く諸佛の稱名を説き與へたまふたのである、然るに彌陀に方便願ありて自力念佛の機も救ふ大悲があるから、諸佛稱名を説き與ふる中に彌陀稱名の願意を洩す、彌陀の稱名を交説して調機方便の手段としたまふたのである、是に依りて龍

樹も彌陀の本願易行を説んとするに前位に童子經の十佛易行を
擧げ、其場處に彌陀の方便願自力念佛を交へ説きたまひ、漸々機を
調べて遂に別願中の別願に引入せしめたまふたのである、故に西
方の無量明を化身佛と見定め、た上は本願如是の彌陀の稱名易行
に融して大行を證明したまふが高祖である、以上は螢明錄讀易行
品石泉等の意を取り集めて辨じたのである。

身光智慧明とは光明、其有聞名者とは名號、是は光明名號一對、即
得不退轉とは現益、願盡生死際とは當益、是は現益當益一對である
生死とは二種ありて一には分段生死二に變易生死である、分段は
三界有漏の果報である、分々段々に生死と流轉するをいふの
である。變易とは次第々々に下地より上地に移り變はり行くを
いふのである。今家は分段の外に變易を別に見ず、是には別義が

あるのである。

北方無動界^{乃至}是故稽首禮

四北方

身具諸相好とは三十二相八十種好である、此論九^{乃至}に當念於諸
佛在天衆中、三十二相具八十好嚴身とある、三十二相の事は大乘義
章二十末^{乃至}に具釋してある、中に相好を論ずるに觀佛三昧經に三
類あり、一に畧中の畧說、是は三十二相である、二に畧說八萬四千の
相である、三に廣說、是は無量身である、三十二相は轉輪王にも具す
る、八十種好は人天に超過す、今は無量の相好をさすのである。
魔怨衆とは大論五^{乃至}に魔に四魔あることを明す、又五十六^{乃至}六
十八^{乃至}に廣く明してある、維摩經四^{乃至}六^{乃至}涅槃會疏一^{乃至}四輔行二の二^{乃至}三
探玄記十七^{乃至}等にも明してある。

東南月明界^{乃至}是故稽首禮

五東南

踰日月とは日月の事は探玄記二^并俱舍世間品及法苑珠林に委
く釋す憂惱とは煩惱の事である、涅槃經四十三^初大論七^九唯識述
記一本^并同五十四^并等に出てゝある。内外苦とは内は内病五臟
不調外は奔車逸馬推壓等種々の諸病を云ふ、大論八^并に出てゝあ
る。十方佛稱讚等とは、大論十^并に佛初めて得道する時十方諸佛
皆光明を現^トて善哉々々と讚^ト、恩の重を以て花を持て十方諸佛
を供養すと(取意)いふてある。

西南衆相界^{乃至}歸命寶施尊

六西南

寶施とは寶は法寶である、財施法施の中法施、尤も勝るゝといふ

とは大論十二^并及び法苑珠林の布施篇に明してある、此佛常に説
法して衆生を濟度したまふ故に寶施と名くるのである。常以諸
法寶等の二句は正しく佛の名義を釋するのである。

問 佛常に説法す何が故に今日の衆生是を聞ざるや、

答 探玄記十五^并に佛不可思議品の文を釋する下に問を擧げ
て之を答ふるに根熟することなきを以の故に生盲は日光ありと
いへども而も是を見ずといふてある。諸天頭面禮等とは諸天の
寶冠佛の足下にあり是は恭敬の至極を顯はすのである。
西北衆音界^{乃至}我今頭面禮

七西北方

七覺華とは無漏の七覺衆生を莊嚴する事を明す、寶積經六十一
に「清淨戒根堅難動。三昧樹葉會處枝。七覺華空堅樹身。無我堅

固我成佛樹。」と説てある、白毫とは法華文句一評に曰く、觀佛經には佛初生時毫は長さ五尺、苦行の時は丈四尺、得佛の時は丈五尺、其毫は中表共に白瑠璃の土の如く、内外清淨、初發心より中間の行は種々の相貌乃至入涅槃一切功德皆毫中に現す、毫は二眉の間に入り、即中道の常を表す、其相柔軟なるは樂を表す、卷舒自在なるは、我を表し、白は即淨を表す、夜光破闇なるは中道の智を表すといふてある、探玄記一評に白毫の事を明してある。

東北安穩界乃是故稽首禮

八東北文は解し易し、

上方衆月界乃是故稽首禮

九上方

上の長行では下方上方と次等す、今は是に反して勝劣の次第に

して上下と次第す諸聖中獅子とは寶積經七に獅子四足の中獨歩無畏にして能く一切を伏す佛も亦然り九十六種の道中に於て一切降伏して畏なきが故に人獅子とたとふ取意といふてある。
下方廣世界乃我遙稽首禮

十下方

閻浮檀金とは例である、此に二義ありて一には閻浮檀金の如くに超絶す、二には閻浮檀金よりも超絶してをると、智慧日とは華嚴經三十五四に如來惠日饒益生盲衆生と説てある。
過去無數劫乃人天中最尊、

通明十佛の中ハ結示、師佛を擧て結するのである、

此下は甚た肝要である、螢明錄下ハ笑螂臂上の下下法事讚甄解一評等に釋してある、今は等の意に依つて三門を作る、一に來由、二

に文句。三に相承である。

一來由

一には所依の經に順するが故に、寶月童子經に曰く、於過去無數劫及廣大無邊無數劫時、有世界名曰寶生、彼有如來名精進吉祥佛應供等正覺、彼十如來於精進吉祥佛處爲菩薩位、於其佛前供養發願、と説てある、又觀佛三昧經に、東方善德佛告大衆言、汝等當知我念過去無量世時、有佛世尊名寶威德上王如來、應正遍知、と説てある、是等は今海德といふのである、梵語は多含の故に、各々其の一を譯出したものならん、例せば十佛の名の經文と違ふが如きものである、然れば同體異名である、是の如く經に元と師佛を説く故、今亦之を偈説したまふたのである。

二には下の問端を開かんが爲の故に、問者の執を破て十佛の外

に更に超異せる師佛の易行あることを示す、而して未だ其法を問はず、唯十佛の源を明す、そこで是非とも夫を問はねばならぬ、夫より彌陀易行を説き顯はさんとの思召である。

三には仰信を起さしめんが爲の故に、問者は稱名易行は聖道不堪の機に與ふるの方便楷梯と思ふて居れども、一切諸佛が此聞名易行で成佛したまへると聞いてみれば、實は仰信せなければならぬと思ふことになる。

四には懸記の文に應ずるが故に、楞伽經に彌陀の本國を説てある、龍樹も亦本國より出るものなれば、是非とも之を明したまはなければならぬ。

五には通易行を奪はんが爲の故に。

六には彌陀本願の徳を顯はさんか爲の故に。

七には聖道は權化の道路なることを知らしめんが爲の故に。
 八には本師の徳を顯はさんが爲の故に。
 九には論主の自歸の所由を示さんが爲の故に。
 十には諸佛具讚の所由を明さんが爲の故に。
 如是の種々の義あるが故に殊に海德佛を偈讚したまふたのである、上の十義の中前の三義は文相に付き後の七義は行卷御引用の思召より立つるのである。

二文句

此中に三偈ありて、初偈は發願の源を示し、次偈は果徳無礙を嘆じ、後偈は結し敬禮である、果徳の一偈の中に壽命等とは佛徳無礙を顯はし、國土等とは國徳無礙を顯はし、聞名等とは攝益無礙を顯はしたのである。壽命のことは聲明録に華嚴疏抄七十六の文

を引く諸經論說三身壽量化則有始有終長短萬品報則有始無終一得永常法則無始無終凝然不變と、今は法身無始無終ならん。今現在十方等とは次上の壽命等の四句は兩向である、今現在十方の句よりみれば十佛の益となり、又海德等の四句より見下せば海德佛の得益となる、聲明録には四句を作る、我遙稽首禮等の意でいへば上の十佛は末、海德は本、そこで本末差別門となる、是諸現在佛等とは攝末歸本門、壽命無有量等とは本末無礙門、今現在十方等とは從本垂末門である。

問 海德は應身佛とせんか、報身佛とせんか、法身佛とせんか、若應身佛ならば光壽無量清淨佛土といふべからず、若報身佛ならば無數劫等と云ふべからず、若法身佛ならば光明名號等といふべからず。

答 觀佛三昧經九_{十五} 本業品の文を安樂集下_{十三} 往生要集下本_{十四} に引きたまふ、此文意に依れば海徳も出世したまふ處よりいへば化身、本國は東方にありとみれば報身報土、然れども今十佛の本師なる義は報應を全したる法身である。

三相承

一には法事讚に上海徳初際如來_乃今日釋迦世尊とある、此文口傳抄よりみれば、彌陀の弟子佛といたまふ、但し法事讚の上では直に彌陀の弘誓に乗したまふとは知れ難し。

二には同傳鈔に「シカレハ海徳佛ヨリ本師釋尊ニイタルマテ番々出世ノ諸佛彌陀ノ弘誓ニ乗シテ自利々他シタマヘルムヲ顯然ナリ」とある、是は般舟經の意に依りて彌陀の弟子佛といたまふのである、又「最初海徳以來ノ佛々モミナ久遠正覺ノ彌陀ノ化身タル

條道理文證必然ナリ」とある、是は大經楞伽經の意に依りたまふて彌陀の化佛といたまふのである。

三には行卷御引用の思召よりみれば海徳即彌陀といたまふが如くである、何となれば西方無量明と彌陀と一といたまふ思召よりみれば海徳も亦彌陀の久遠の徳を顯したまふのであらふ。是は本末四門がかゝる、本末差別門は法事讚の當分、從末歸本門は口傳抄の初義、從本垂末門は口傳抄の後義、本末無礙門は行卷の御引用、此無礙門は絶對の法門にして、經でいへば聖道一代を即淨土門といたまふ三部中の一代修多羅藏である、佛身でいはゞ諸佛即彌陀、殊に海徳は諸佛の本師であるから、彌陀本師の徳を顯はすものと顯はしたまへるものである。

問 此論偈直ちに海徳即彌陀の義ありや。

答 一には所依の經に依り、二には論主の意より推し、三には論文の前後より照し、四には直に文に依り、五には道理に依りて答ふべし。

一に所依の經に依るとは、童子の所問に應じて易行を顯したまふけれども、機未熟の故に諸佛易行を説く、此中に釋迦佛の從假入眞の密意がなからふ筈はない、そこで方便彌陀の願意に乗じて西無の方便化身を説く、此本佛本師は通途の諸佛ではない即ち彌陀久遠本師の義なること云はずして明である、論主此意あるが故に經には本國を東方と説てあるを今は略して彌陀の方處を説かざるものと一致せしめたまふたのである。

二に論主の意に依るとは、論主の懸記楞伽にあり、其楞伽に十方佛彌陀の本國より出たまふことを説く、然れば論主自らも彌陀を

本國とし十方一切の佛も彌陀を本國としたまふことを知りたまふ、此十方十佛の本師本佛を説くに何ぞ異佛を顯はしたまはん、彌陀の本師を説くが龍樹の本意である、龍樹若法を説かざれば致し方がないが、苟も法を説くときは易行の至極十佛の本師を他に譲りたまふ筈はない、若し隨他意にして本師を諸佛に譲るならば易行品も亦諸佛に譲らなければならぬ、然るに隨自意を顯はしたる彌陀章には最勝の義も易行の義も見ゆれども未だ本師の義は見ゆてない、そこで此海徳を彌陀とし諸佛を説く中に彌陀本師の別徳を海徳等と顯はしたものが論主の意である。

三に論文の前後より照すとは、入初地品に「般舟三昧及大悲名諸佛家從此二法生諸如來此中般舟三昧爲父又大悲爲母等とある、近くは行卷に引用してある、此般舟大悲の父母は彌陀の別名である、

何となれば般舟經の般舟三昧の正意は、依念彌陀三昧であるから、般舟三昧は念佛三昧の異名である、又大悲とは觀經には、佛心者大慈悲是とある、是は總即別にして彌陀の事である、然れば諸佛の父母とは暗に彌陀を本師とするの意を洩したまふたものである、又今の偈には東方の本國を隠して唯國土清淨等とのたまひ、彌陀章には方處國名を隠して諸勝所歸處とのたまふ、實に符合してをるといはねばならぬ。

四に此文に依るとは、海德とは眞實功德寶海の義である、已に光壽無量國土清淨と國名攝化を示したまへるものは光壽無量故名阿彌陀の義を顯はし、聞其名號信心歡喜の益を顯はして以て彌陀とするの意である。

五に道理に依るとは、佛々平等の故に、以て彌陀とすれば彌陀と

なる、故に今は海德の法理即彌陀とするに碍るところはない、又彌陀即諸佛同乘一如にして無二無別なるは十方佛何れも皆然りである、就中今本師の義を説くもの彌陀本師の義を説くに同するが故に、是を融して彌陀とするのである、假令末佛にもせよ本師の義を持した時は彌陀の本師を以て暫く諸佛に持したもののなれば是を本に融して彌陀とするに更に差支はない、上來五由を以て海德即彌陀の義を伺ふ、宜く思擇すべきことである。

問 何が故に本師の義を諸佛章に顯はして彌陀章中に却て顯はさぬのであるか。

答 彌陀章は正しく三經に依りたまふ故に偏に十劫成道を唱へ發願酬因度生の勝るゝを以て易行の至極を顯はすの思召である

又は云ふべし易行の至極を顯はすには本師の義を顯はすに及ばず此義は却て他經に讓るの意である又本門は聖道に尊ぶ處淨土經は爲凡の故に彌陀章中に顯はさず彼が好む處に従ふて之を讓り融するの相たである又自他共許の爲の故に彌陀章の我家で云はんよりは他の諸佛章中では是を明すが共許の便となる。又諸佛の易行は易の偏に局る彌陀の易行は勝の義を兼ねるそこで諸佛章中に彌陀の勝徳を開て以て諸佛の易行は取るに足らざるの義を彌々顯はすのである。

問曰但聞十佛^乃阿惟越致耶

唯說易行分の第二、二發問生後

乘誓院曰此問答甚た味がある問答によせて機の堪受を示すのである何となれば上の問を答ふるに佛法に無量の門がある難行

もある易行もある其易行を示すに十佛の名號を説て聞せて名號不思議の益を示したまふそこで問者が初て聞たけれども實に名號の利益も然るべきことであると思ふゆへ最早彌陀本願の易行を聞せても宜しかるべきやうに見ゆる其趣を以て爰に問答して顯はしたまふのである。問曰但とは餘縁をからざるの語で問者は聲聞緣覺を求むる位の易よりしか知らぬ名號易行は決して知らぬ然るに十佛易行を聞て未曾有の思をして斯る易行は十佛に局るであらふ此外にはあるまいといふ處で但といふたのである。更にとは此の但の字に對して問者此外にならと思ふ上に捨てがてらに更に又餘佛餘菩薩の易行がないかと問ふたのである夫を爲の字と耶の字で顯はしてある答曰等とは又答者の意は是で彌陀易行を説ても堪受するや先づあてがうてみせる相で阿彌陀等

佛及菩薩と擧げ、夫より如是阿彌陀等諸佛亦應恭敬等と正説を許したまふ思召なりと辨してある。

了達院の意を以て辨すれば、

問 上の十佛章に聞名不退もあり一心不亂もある、然れば下劣所求の法は上に濟でをる、何の不足ありてか今茲に更に餘佛の易行を請問するや、恐くは是易行の便に乗ずて一機の爲に廣く易行を明し置んと欲して問を立てたものであらふ、已に然らば彌陀章に因明分齊なるべし如何。

答 先づ文の起盡に依つて辨せば、上の行諸難行に對して信方便易行を明す、即ち陸道水船の喩を擧げたまふてある、嶮難の相たは上の序品已來に離れたれども未だ乗船の義が顯はれてない、十佛易行を設くれども是が水船なりとは未たいふてない、之を推し

て問ふの勢である。又海徳の下に聞名不退もあれども彼の文兩義ありて十佛の易行ともなれば未だ師佛の法は易行やら難やら知れぬ、若易行ならば如何なる易行であるか聞たいといふの勢がある。又上の十佛易行は皆聖道の善で易行としては甚だ不足である、第一の善徳の下に「初中後善有辭有義所説不雜具足清淨如實不失」といふ中に釋尊一代の化儀が收まつてある、法華序品に二萬の燈明佛が説法したまふことが出てある、其説法全く今日の釋迦の如くと説てある、會疏一の上梓に初中後の善は即是頓教序正流通あり、即ち時節善といふ、其義深遠とは即頓教了義の理なり、二乘其邊底を知らず故に深遠といふ、是が第二善なり、其語巧妙等とは即是頓教、八音の吐く處理に會して直説す、菩薩身を喜ぶ即頓教の文にして第三語の善とす、純一無雜とは二乗と俱もならぬ即是頓

教第四の獨一の善なり、具足とは具さに界内界外滿字の法を明す
 卽是第五の頓教圓滿善なり、清白とは二邊の瑕穢なし是卽ち第六
 頓教の調柔善なり、梵行之相とは卽是第七頓教無縁の慈善なりと
 いふてある、是を彼家では初中後とは一に時節善序正流通とも三
 乘對機とも戒定惠とも聞思修とも少年中年老年ともいふて是を
 時節善といふ、是を分ち七種の善法としてをる、然れば三世佛の善
 法今日の釋迦善法も同トことである、獨善德のみでなく餘の九佛
 も皆然りて自力聖道の七善を説くゆへ易行は未だ顯はれない、故
 に今論七^{十一}に難行を説くに初中後といひ、又九^{十二}に初中後の善等
 と七善が説てある、然らば前所明の中に難行の中の易行となりて
 あれば十佛易行は難を免れず、不足の思が十分にあるから此問が
 起つたは無理ないことである。又彼は通なるが故に龍樹の正意

は此土此身の不退に非ず、往生淨土門實成佛の不退を説きたまは
 んが爲に不足を抱ひて此發問があつたのである。又彼の易行尙
 ほ不堪である、なせなれば善德の下に先佛の處に於て善根を種た
 人でなければ叶はぬと明すが故に「於先佛所種諸善根」このたまふ
 是に依てたとひ易行を修すれども疑則華不開の分齊である、又無
 上菩提を期せざるの易行なるが故に、菩提を得るに早く不退に登
 らねばならぬ、其不退の爲に二乗を恐れて求むる速疾易行である、
 十佛易行は菩提を明さず、彌陀は無上菩提に至る、十佛の上に其義
 全く見ゆざるに非れども、究竟する處は別時意にして不退すら尙
 ほ多生に流る、況んや成佛に於ては久乃可得を免るゝことは出來
 ない、是の如く十佛の易行に種々の不足あるより此發問が起るの
 である。

問 問の中只十佛等といふて海徳を除くものは何の義であるか。

答 一義に弟子の易行を擧げて師佛を攝するのであると一義に今は現在諸佛の易行を明す處なるが故に過去佛は論ずるに及ばずと又一義に上は念十佛易行の相た師佛を擧ぐる者は唯其本佛を示すにあるので機の請求に應じたのではない。又一義に論主の密意よりいはゞ此問は海徳佛の出る處より近く之を承て、其師佛の易行を聞たいといふより起れば下の彌陀章を引出す張本を海徳よりする意である、故に別に海徳を十佛と同く前を牒する中には入られぬと。

已上は了達院の意である、今私に思ふに乘誓院は文上に付て辨せられ、了達院は一層推して論意の甚深なる處より辨立したる

もので、二義を并用すれば全きことを得るのである。

答曰阿彌陀等乃稱其名號。

唯說易行分の第三、三答釋、此中二、一略明、二別辨、今は初である。

問 問の文に更有の二字あり、是に依れば答釋の下にも更有の言を置くべし如何。

答 坊本には如是阿彌陀等の處に更有阿彌陀等とある、彼は答曰の直下にあるは誤りたるものならん、そこで如是の二字を脱してある、行卷御引用は更有の二字なければども如是の二字がある。

問 問の下には餘佛餘菩薩の名といひ、又答の次の文には阿彌陀等諸佛と云ふもの如何。

答 餘佛餘菩薩の問を承けて阿彌陀等佛及諸大菩薩と具さに明し、次の處に菩薩を略して諸佛を擧ぐ、併し等の言を入れたまふ

て諸菩薩を収めたものである。

問 及の字の有無如何。

答 是は因果の別を示す迄にして強て意味のあることではな
す。

偕て此答釋、一往は機の受不を試ん爲めに彌陀諸佛菩薩といふ
て聞せる、然るに機は堪受して佛法は不思議なものである、此上に
またく、この様なものがあらふ、十佛の易行の外に箇様な法はな
かるべしと思ふて、捨て語にて問ふたが、かゝる不思議な法があれ
ば此上は底知れずと思ふ相が見ゆる、そこで今當具說無量壽佛等
と本願易行を説て聞かすれば、超世不共の法を了知して最早問の
起ることはない、そこで諸佛菩薩は自ら彌陀の流通を成すと。是
は乘誓院の意である。了達院の意でいへば十方佛に已に易行が

あるから師佛にも易行がある、本師が彌陀の易行なるならば餘の
佛菩薩にも亦易行ありと、一に毘婆尸佛等の佛菩薩を擧たもので、
是が論主の隨自意である。

今私に思ふに未熟の機よりいへば捨てがてらに易行を問ふた
ものといふは、次の除業品の初に此外に餘法なきやと問ふて懺悔
回向等の善が説てあるより見れば、此問が直に本願の別易行を問
ふたものとは見ぬ、又答釋から見れば彌陀諸佛菩薩と并べてあ
る處は問者の語に付て何程でも易行ありと答へたもの、そこで除
業品より見れば彌陀諸佛菩薩を未熟の機は同等に見なしてゆく
ゆへ、別時意分齊となる、是が傍明と見る相たである、然るに今當具
說等の彌陀易行を聞くの純熟の機なれば、此問は十佛易行に不足
を生じて、またく、易行があるべしと問を出し、未だ彌陀易行を聞

ざる前なれば餘佛餘菩薩等と汎爾に問ふ故、答も汎爾に阿彌陀等と佛菩薩を并べ出したれども、純熟の機なれば彌陀眞實の別易行を明さなければならぬ、問者の意を満足せしむるが今當具說等の彌陀章である、是よりみれば下の諸佛菩薩は彌陀易行の流通分となりて三世十方彌陀易行の流傳せざる處なきことを顯はしたまふたのである、是の如く伺へば味か深いのである。

今當具說無量壽佛。
二別辨、此中二、一正明彌陀易行、二傍明諸佛菩薩、正明中二、一散說二偈說、散說の中に二、イ所讚の名號、ロ本願成就、今は初である。

問 無量壽佛は上の彌陀と同別如何。

答 有人解して異なりとす、何となれば羅什は小經を譯するに光壽無量故名阿彌陀といひ、經題も亦梵語を存して阿彌陀經と稱

し西方の本佛を取る、西方段の無量壽佛は別體なるを以て翻名を擧て是を簡異してをる、横川の略記に佛名經第七に西方の阿彌陀といふに多く同名あり、六方段の西方の彌陀は別體なりと釋してある、今も梵名は我本師の彌陀、翻名は末佛なりと。

今日行卷御引用の思召に依れば、今當具說無量壽佛と訓點を施したまふてある、然れば、今當に具に説くべし無量壽佛世自在王佛と讀み下すものは祖意に違ふのである、當に具に無量壽佛を説くべし、如何が説く、云く世自在王等の一百餘の能讚佛を擧げて、所讚の彌陀易行を顯はしたものである、是の如く伺ふに五由ある、一には前の略答に應ずるが故に、阿彌陀等の諸佛と初に阿彌陀あれど今當具說無量壽佛は是に當る、等の諸佛は毘婆尸佛等の諸佛である、夫に次て菩薩を擧げてあるから、次第に付て思ふべきことであ

る。二には前後の諸佛是皆長行偈頌があるけれども、今此一百餘佛のみ下の菩薩と同一く長行のみで偈頌のないのは能讚佛の故である。三には前後に皆應念等の勸發あり、菩薩にもある、然るに一百餘佛に此勸發なきものは龍樹所讚の佛に非ずして彌陀能讚の佛である。四には前の佛に敬禮がある、今なきものは能讚佛とするからである。五には後の諸佛皆又亦とありて章段の別をなす、今章段を分つの體裁なきものは能讚佛とするの意である。

問 羅什は梵漢の異を以て本師の彌陀と通諸佛の彌陀と分別するに似たり如何。

答 是は調べが足らぬからである、己に衆經目錄に依れば後秦弘始四年羅什譯の經に無量壽佛經一卷、一に阿彌陀經と名くとある、然れば無量壽佛即阿彌陀とすることは是に知るべきである、又

小經とても一概にならぬ、慈恩光照は同と取る、法霖師は同體なれども能所讚を顯はさん爲めに能讚の阿彌陀佛は化身にして諸佛の隨一、所讚は本師、體は一なりと、今此易行品の上は長行の初は壽命無量を以て標す、大觀兩經の題號是である、又偈の初には無量光明惠と置て光明無量の相を示す、此光壽無量なるものを阿彌陀と稱するゆへに、中間に阿彌陀佛本願如是とのたまふ、是の如く光壽二無量の彌陀の智體を讚するが龍樹である、大經には無量壽佛威神功德等と説き、小經には光壽二無量故名阿彌陀と説く、龍樹は之を無量力功德どものたまふ、光壽を標して以て阿彌陀の徳を讚したまふをこそ殊に長行の初に無量壽を擧て偈頌の發端に應トたものである、故に今當具説以下を以て彌陀章とするのである、一百餘佛の諸佛章を立るものは宜しくないのである。

世自在王佛乃寶相佛。

口本願成就、此中二、一諸佛稱名、二念佛往生、諸佛稱名の中に二、ア畧舉諸佛、イ結示稱念、今は初である。

此一百六佛に付て、螢明錄に五門を作る、今夫を五番の問答として詳にすれば。

第一に問曰、此中に同名あり、是同體なりや別體なりや、又幾種の同名ありや。

答 同體異體は知り難し、私に蛇足を畫けは何ぞ同名同體のものを重複して出したまふの理あらん、恐くは同名異體にして所依も亦別であらふ、六種十二佛の同名がある。

第二に問曰、類似の佛名あり、如何が類せる、又幾箇の類似あるや。
答 梅檀佛と除惡根裁佛一是蓮華香佛と大香佛二是道路佛と道歉

佛三是華光明佛と華莊嚴佛四是梵音佛と梵聲佛五是淨明佛と光明佛六是須彌頂佛と山頂佛七是音聲自在佛と音王佛八是已上八種十六佛ある

第三に問曰、此一百餘佛の所依の經は如何。

答 讀易行品には無量壽佛世自在王佛師子意佛の三は般舟三昧經と佛名經に出づ、法意佛は佛名經に出づ、梵相佛は諸佛所護念經に出づ、世相佛世妙佛慈悲佛世王佛人王佛は涅槃經及び佛名經に出づ、月德佛は百佛名經に出づ、寶德佛は所護念經に出づ等と所依を舉げてをる、委くは讀易行品下五に出てをる、乘誓院曰く、螢明錄は畧して舉ぐ、讀易行品は具に舉ぐ、何れ一經や二經に依りたまふに非ず、多經に依りたまふならん、龍樹が龍宮に於て闍浮提になき處の經迄御覽なされたを思ひやれば、日本に渡來してあるものばかりでは必ず思召を盡すべからずといふてある、此評は實に的

中してをる。

第四に問曰世自在王佛は彌陀佛の師とするか、能讚佛とするか。
答 讀易行品の下^下には有人^臂以て大經の所説とす、然るに彼の饒王は過去佛なり、今は現在佛なるが故に混すべからずと、今日此破一往は可なれども再往は然らず、何となれば佛は三身相即する故に大經では應身の當體なれども、此應に即して報あり、なせなれば光顏魏等、又は願我作佛齊聖法王等とある、然れば應の當體即報なるは怪むに足らぬ、然るに今師佛が能讚に下りたまふは、螢明に二義を擧ぐ、一には師佛尙ほ讚す況んや餘佛をや、是れ超世諸佛の義を顯す。二には彌陀本師の義を顯す、三世諸佛依念彌陀三昧の義に約すれば、久遠の彌陀に即する法藏にして、選擇即無選擇に歸し、師佛即弟子佛である、故に能讚の中に攝するのであると。了

達院は三義を擧ぐ、一には皆共讚嘆を成せんが爲の故に、二には善巧方便の師なることを示さんが爲の故に、三には十七願中の諸佛なることを成せんが爲の故にと。

第五に問曰此諸佛を擧ぐるもの何れの經意に依るや。

答 大經の「十方恒沙諸佛如來」と、小經の六方諸佛である。

私に一問答を設く、何が故に一百六佛を擧ぐるや、曰能讚無量である、一百六佛の數に別義はない、只現在佛を擧ぐるのみである。是諸佛世尊^乃本願如是。

イ 結示稱念

此下讀易行品は稱名憶念を龍樹に約してある、今は行卷の御指南に依つて諸佛に約す、是諸佛の是とは上の諸佛を指す、一百六佛にして願文の無量諸佛である。現在とは願文成就の文の上に更

に此二字を加へたまふ、清淨の二字も加へたまふのである、是が願成の十方世界の句を顯はしたのである、稱名とは願の咨嗟稱我名成就の讚嘆である、茲には讚嘆といたまへども願は慶讚略讚共に舉げ成就は慶讚に約してある。何故に諸佛は讚嘆といたまふや、曰く一に依念彌陀三味の恩を報せんが爲の故に、二に彌陀の大悲を行して化他せんが爲の故である。

問 六要には諸佛稱名は稱念に非ず稱揚の義なりといふてある、今此義を用ゆるや否や。

答 蹄浴記は之を用ゆ、快樂院は二義ありとす、法華に喜稱南無佛と説き、大論十三釋迦南無佛と佛名を稱へたまふことを顯はし、大經には三世佛互に相念す況んや本師の彌陀をや。

今此處に何が故に略を舉げたまふやといふに、廣略元より一な

れども下の偈に「讚揚其功德」と廣を舉ぐるが故に、長行は略を舉げて互顯したものである。

憶念とは諸佛の彌陀に歸することを顯はす、阿彌陀等の句は向上向下の二を含む、高祖は向上に約して取りたまふ思召である、往生要集上末「諸行勝劣の下の御引用では下に屬して阿彌陀佛本願如是と、如是を若人等と顯はす意で阿彌陀佛以下を引證したまふてある、二義あるべきことである。

若人念我稱名、三菩提、

本願成就の中の第二、二念佛往生、此中二、イ承前正明、ロ承上起下、今はイである。

此下を讀易行品は稱名正因に歸して遂に信心正因を妨ぐるに至る、取るべからざるの僻解である、螢明錄の意は是十八願成就の

義意を顯はすものとしてある。

若人とは願文の十方衆生、成就の諸有衆生である。

問 何が故に若人と云ふや、

答 機の自體に約すれば二卷抄上上に所被の傍正を明し天と人とは正所被としたまふ、若悲願一乘海よりみればたとひ彌勒といへども天人中に落在す、大經に展轉五道等と一切諸善を有漏の善と映奪せられてみれば人天中に入らねばならぬ。了達院は三義を擧ぐ、一には人界の所教なるが故に、二には諸佛に接するが故に、三には三經一致を顯はすが故に、小經には若有人と説て大觀の衆生即小經の若人といふことを示すと。

念我稱名とは本願の三信十念成就の乃至一念である、本願は信より流れて出る行なりと顯はすの次第、成就は盡形壽を初歸一念

に卷き收むるの次第である、今此に念我稱名と出すは互顯である、具さには我名を念ト我名を稱するといふことである。

問 念我は本願の三信とは何を以て知るや、

答 通途に依れば念は心所法、稱は語表色であるから違ふてを、別途の上で今文に付ていへば次に稱名と出してあれば今の念は稱念の義でないことが分る、亦觀念でないといふことは偈及長行に少しも觀念の沙汰はない、然れば心念とせねばならぬ、次の偈には「若人願作佛心念阿彌陀」また「信心清淨者」とあるは是である、是即ち成就の一念にして本願の三信を念我とのたまふたのである、天親の三信を合して一心としたまふものは成就及び今文に依りたまふたものであらふ。

稱名とは本願の十念である、本願の十念を稱名と呼びたまふ初

めは此文である。願文直に何を以て稱名とするやといふに、了達院は二義を擧ぐ、一には乃至といふが故に、多少上下前後を乃至の言に含む、二には十念といふが故に、信心は一念なれば何ぞ十種の別あらん、是即ち觀經の稱佛名故より願文を伺ひたまひたものである、願文では乃至、觀經では不絶、小經には、若善導は下至、みな是相續を顯はすのであると。

自歸とは成就の文の如く、三信十念ある中稱名相續の一形の行を、本とに推し、卷上げて、自歸の一念の處が、即時入必定たることを示すが故に、高祖は憶念彌陀佛の處、即時入必定、入必定の上の稱名相續、即ち行者報恩の意情たることを示したまふのである。

問 此の念我稱名の相たを押へて自歸とのたまひたものにて、即時は稱名の時といふことにならるべし。

答 此文の上で一往は問者の如くであるが、偈の「人能念是佛」即時入必定「また、心念阿彌陀應時爲現身」よりみれば相續を卷て信に歸して歸命の一念を自歸としたまひたものである。

問 自はオノヅカラの義なりや、ミヅカラの義なりや。

答 行卷の御訓に依れば自は自然の義にして他力を顯はす、高祖は處々に「自ハオノヅカラトイフ」とのたまふは他力自然の義である、次の偈は自然行十善とある例にて知らるゝ、所謂信することゝも念することゝも如來の御方便よりおこさむるものなりのことゝろである。又自はミヅカラといふ時は他に簡ぶことである、次の偈に「自度亦度彼の自度と、同く自利といふに同トイ」。天親の「我心の我も同トことである、此中に二ありて、一には直示歸依の義、此時は自身」の事を所謂往生は一人々々の凌ぎなりといふ

こゝろである。二には捨維歸正の功を示す、是は我と捨維して人から勧められて、いや／＼歸正するのではない、徹頭徹尾信トた事である。

即時入必定とは即は同時即にして現生不退である、其義は上に顯す如くである。

得阿耨等とは若不生者の生を顯はす。

此一段二十二字の中に眞實五願を含む、念我の我とは光壽無量故名阿彌陀にして即ち十二十三の願、稱名とは是を諸佛に讓る、下に讚嘆とあるから即ち十七願、高祖の十念を十七願に送りたまふものは此意に基きたまふのである。念我の念は三信にして十八願、得阿耨多羅は十一願、然れば此文に眞實五願を含蓄してをる。是故常應憶念以偈稱讚

口承上起下、

是故とは十七十八兩願を顯はして夫を是故と承て下の偈を起す故に如此科するのである。此中憶念とは上の念我の心念が相續するをいふのである、故に此憶念復信心と取らるゝのである、信心は必ず憶念であるけれども憶念は必ずしも信心でない、何となれば稱名憶念すれども無明由在の憶念があるからである。高祖は憶念彌陀佛本願等と念我と憶念とを一として本願力を信ずることを示したまふてある。

常とは恒時相續を示す、以偈稱讚とは龍樹の報恩にして上の念我稱名の稱名である、高祖は之を合して唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩とのたまふのである、此偈讚即報恩であるといふことは、近く安樂集下四に大論を引き三番の解釋を設けてある、龍樹は彌陀

に依て自利々他したまふのであるから報恩の思が必ずある、報恩の爲に稱讚したまふのである。
無量光明惠乃是故稽首禮、

正明中の第二、二偈説、此中三、一總嘆、二別嘆、三結示、總嘆中二、イ標覺體讚光徳、口舉照益嘆頓極、今は初である。

無量光明惠とは

笑螂臂は靈山現土の文に依つたものといふてある、螢明録は之を助釋して上の散説の今當具説無量壽佛等とは之は靈山現土の前の文に「無量壽佛十方國土諸佛如來常共稱揚讚嘆等」とある、是は十七願成就の相である、是を受け來て讚偈をなしたまふ故に無量光明惠等とは無量壽佛放大光明等の文に依りたまふこと明である。無量光明惠は無量壽佛の放大光明無着無碍の智を今は惠と

顯したまふたのである、此無着無碍の智は齊く信心を得らむる故に奉讚して無量光明惠とのたまふたのである。觀經には光明熾盛不可具見と説く、是は盡十方無碍光如來のことである、小經には照十方と説く、天親菩薩は是に依て盡十方無碍光如來と仰せられたのである。今は三經一致の大經によりたまふ故に上の散説も本願を丸出したまふたものであると。又一義を加へていはゞ大經の號無量光佛等の文に依りたまふたものである、無量壽佛を上には具説無量壽佛といひ、今は其相に約して無量光明惠とのたまふたのである。

身如眞金山とは大經に威徳巍々如須彌山王不動高出一切諸世界上高顯と説く、今も高顯と不動の義である、觀經の無量壽佛身如百千萬億夜摩天閻浮檀金色金色身を含む、大經は智の故に不動、觀經は悲

の故に動、小經は悲智不二の故に現在其前と説く、觀經の立は動の義、小經の現は唯顯現するの義、又立は慈悲の切なることを顯はす現は顯説では來迎の義、隱説では來にして不來の義、故に悲智不二の義である。我、今、乃、稽首禮は文の如くである、金色妙光明等とは上を顯す、光明惠の化境を顯はすが故に普流諸世界といふ、隨物於其色とは隨順爲物の義にして法よく機に叶ひ機よく法に入る故に物に隨ふといふ、其色とは利益を顯はす、但し現當に通ず、下の別讚にて明である、是故稽首禮とは發明錄に三門を擧ぐ、一に禮儀異相、二に敬禮立旨、三に彼此對辦、一に禮儀異相とは大論十に小品經の菩薩頭面禮佛足の文を釋して、問曰應言禮何以名頭面禮足答曰人身中第一貴物者頭、五情所著而最在上、故足第一賤履不淨處最在下、故是故以所貴禮所賤貴重供養故、復次有下中上禮、下者揖中者跪

上者稽首、頭面禮足是上供養、又百卷^三に禮有三種、一者口禮、二者屈膝頭不至地、三者頭至地、是爲上禮、人之一身頭爲最上、足爲最下、以頭禮足恭敬之至と、華嚴疏二十七^四に勒那三藏七種の禮を説く、清涼は三を加へて以て十と爲す、一には我慢禮、二には唱知禮、三には恭敬禮、四には無相禮、五には起用禮、六には内觀禮、七には實相禮、八には大悲禮、九には總攝禮、十には無盡禮、又寶窟上末^四四句分別す、一には禮にして不敬、二には敬にして不禮、善心に佛を嘆じ佛を念するが如し、三には亦敬亦禮、四には不禮不敬、又四句分別す、一には心に禮して身に禮せず、須菩提の端坐して念佛するが如し、二には身心共禮、勝鬘夫人の如し、三には身に禮して心に禮せず、調達の佛を禮するが如し、四には身心不禮、外道の佛を見るが如しと、起信論義記上行大乘義章四本^二古に南無といふ即是禮拜なり、應に納莫と

いふべしと、二に敬禮支旨とは四義あり、イ通儀に順するが故に一切佛皆禮あり論主彌陀法を宣説して禮す、ロ荷恩の爲の故に、大論第十、近くは安樂集に引きたまふ、ハ誘引の爲の故に、論主の正意彌陀にあり然るに直入する能はざる機あるが故に誘引す、ニ無碍に達する故に、一切諸佛即彌陀なり、無量光明惠中の諸佛なるが故に、三に彼此對辨とは諸佛中二十五偈ある中多く稽首といふて歸命は只一ヶ處である、彌陀章は一佛にして三十二偈あり、稽首禮歸命禮二十餘處ある、歸命とは歸命の本願より出たもので、論註の歸命は重しといふの義を顯はしたものである、一多本末勝劣の殊別は明かである。

若人命終^{乃至}是故我常念、

□舉照益嘆頓極、

此中五門を作る、一に現當兩益とは今の二偈無量徳を現當二益に攝す、故に二益中に無量徳を具するの相が見えてを、今私に現益中無量徳を所念とするは、能念の無量徳は所念より成ずることを現當兩益の中機法互顯したまひた者であらふ、此中生彼國者とは諸佛易行になき處で此土入聖に簡ぶのである、彼の易行は此土入聖の域を免れぬのである。二に三種功德に約すとは、是即ち上の本願如是よりみれば三種莊嚴願の莊嚴を顯して諸佛不共を顯はすのである、上の二偈八句は佛徳、今は菩薩功德、此中に自ら功德を含んでを。如何國土を攝するかといふに、淨土に生すれば無量功德を具することを得るとは、是安樂自然の國徳である、是初生即極の彌陀の涅槃を無量徳と號すると同トい、無量徳とは涅槃の事になる、何となれば此土正定に入た其上の無量徳である故に、又

前後に無量徳は皆究竟の者を顯はしてある、是即ち諸佛章にはなきところである。三に五念門に約すとは、禮拜と讚嘆は文に在て分明である、作願は我常念に當る、何となれば恒時相續の憶念にして即作願である、回向は終の二偈にて分明である、觀察の一門は彼の聖道の至要にして難行である、若之を明したならば其名難行に濫するが故に之を明したまはぬけれども、義は作願の中に含まれてある、作願中に智業の義あるは觀察である。四に五願に約すとは、初の二偈は二十三、若人命終時等とは十一願、即ち成就文の其有衆生生彼國者を取る、其有衆生を若人といひ生彼國者を得生彼國者との玉ふ、命終時とは論主の加へたまふ處である、是に二義ありて往生淨土門を顯はすに具さならしめんためと、別時意を簡んで順次の往生なるを顯はさんが爲である、了達院は五義を加へ

て諸佛の易行に簡んが爲の故に、^一是爲凡の經意を示さんが爲の故に、^二是所期の本意に約するが故に、^三一尊の指揮を戴くが故、^四是滅度の願功を顯はすが故に、^五といふてある。五に問答とは此中に五番ある

第一に問曰何が故に當現の次第なるや、

答 彼土即證を顯すを以て此土難證に簡ぶ、

第二に問曰大經に無上功德を此土の徳とす、今之に違するものは如何。

答 經の義を次の偈で顯はす廣門無量の法相を示す、私に曰初生速極を顯す故である。

第三に問曰我歸とは初めて歸するに似たり如何。

答 具にいはいはゞ我已に一心歸命すといふ意である。

第四に問曰何が故に國名を擧ぐるや、

答 上に辨するが如くである。

第五に問曰本願一乘圓融圓滿の義ありや、

答 卽具無量徳の卽と、卽時入必定の卽の字は同時卽にして頓極の旨である。

彼國人命終_{乃至}是故歸命禮、

二別嘆、此中五、一聖衆の國徳に約す、此中イロハニホヘトの七あり、

イ應化自在、

不墮要地獄とは古來多義あり、一に笑螂臂は之は不更惡趣の願とす、然らば諸苦といふは如何といふに之は變易であると、讀易行品は大經の四十億の菩薩得不退轉の文と、又憬興の憬に彌陀佛の

威徳廣大を聞が故に不退轉を得る、此土の多惡を聞て誓て濟度せんと欲するが故に弘誓の功徳を以て而も自ら莊嚴す(取意)とある文を以て笑螂臂を助釋してある。二に是は現生の益である、獲信せば娑婆の人に非るが故に彼國人といふ、此人諸苦を受くと雖も惡趣に墮せず、般舟讚に「忻則淨土常居等」といふてある。三に陳善院は生卽無生の益と科して此益は上の卽時入必定の處にある、具さにいへば彼國に生すべき人臨終の時假令諸苦を受くとも諸邪業繋の引かざる處であると、此義は第二義とは小異である、螢明録は二十二願及十五願に依て還相の上の自在化の相なりとしてある。

若人生彼國_{乃至}我今歸命禮、

□快樂不退、

此一偈を笑螂臂は無三惡趣の願とするは宜くない、是は不更惡趣の願にして第一願を兼ねる、往生要集の快樂不退の下に引きたまふ。

問 何が故に人天を簡はざるや

答 若廣門に依れば人天の假名あるが故に又善趣の一分なるが故に。

人天身相同乃至是故頭面禮、

ハ身相端嚴

此中に金山頂とは一往は上の佛と違なれども其一分を喩へたもの、決往は略門平等なることを顯はす、諸勝所歸處とは古來三議ある、一に依報に約す、極樂は惣べてのもの、勝れたるものに歸し依て出來たる處で所謂選擇本願の土である、二に佛に約す、諸勝と

は諸佛のこと、所歸とは諸佛を全く彌陀に歸せしむるのである、三に往生人に約す、諸上善人俱會一處の土である。

其有生彼國乃至是故稽首禮、

二六通無碍、

此三偈解し易し、天眼天耳他心宿命の四通は文に在て明である、神變は神足通、無我無我所は漏盡通である。

超出三界獄乃至是故稽首禮、

本超出難思、

讀易行品には聲聞無數の願と解してあれども宜くない、是は上人天の句を受けて非天非人を示し來て今も亦非衆生非菩薩を顯し而も五乘示現することを示すのである、超出三界獄といふは爲凡の經意を顯はすのである、目如蓮華葉とは葉は花片を指す、一相を

舉げて相好具足の願益を顯はす、聲聞等とは聲聞無數の願益を示す。

彼國諸衆生乃稽首衆聖王

へ法樂微妙

其性皆柔和とは觸光柔軟の願益を示す、自然とは國德自然である、十とは滿數である、

問 何が故に諸善といはずして十善といふや、

答 今論の次下の分別二事業道品の中に難行の十善道を説き以て三乗の道因なることを示してある、今其機に應ずるが故に易行の十善を顯はすのである、然れば廣略相入不思議の善である。

衆聖王とは、一義に衆生は彼土の聖衆である、聖衆中の王は彌陀佛であるといふ意なりと。又一義に諸佛を指して衆生といひ王

とは陀彌は諸佛の本師王なることを示すのであると。
從善生淨明乃是我歸命、

ト解脱無碍

從善生とは、一義に依報に約す、正道の大慈悲は出世の善根より生ず性功德成就の國德を顯はすと。又一義に聖衆に約す、善とは出世の善性功德である、是より淨土に往生する人なるが故に。淨明とは垢穢を滅するが故に淨といひ、無明を破するが故に明といふ、二足中第一とは二足とは兩足衆生の第一といふこと、無量無邊數は衆生に付く。又は云ふべし、善より生ずる十方來生の人無量無邊である、是が二足中の第一なりと。
若人願作佛乃是我歸命、

別嘆第二本願に付て佛德を嘆す、此中イロハニホヘトの六あり、

イ信方便の益

問 上に已に佛の本願に付て顯はしてある、以下何が故に殊に本願に付て佛徳を嘆ずるといふや。

答 螢明錄に曰、文相に兼正の異がある、是よりみれば上は聖衆に付て國徳を嘆ず、彼國人「若人生彼國」といふ、次下は二徳を明して是を結してある、其土具嚴飾とは國徳、佛足千輻輪とは佛徳にして二徳を結して以て下の文を起す、今は正しく本願に付て佛徳を嘆ずるの文である。「若人願作佛」彼佛本願力等と本願力の言が若國徳中にあらは本願に付て國徳を嘆ずと云ふべきである、此本願力は正しく應時爲現身の本願力にして上に向ふ時は無量光明恵に應ず、偈頌を一貫として無量光明恵の義である、此本願力即無量光明恵にして同く機法一體の應時爲現身で、此本願力が又始終一貫す

るのである。

若人とは一切善惡の凡夫をさす、願作佛は上の阿耨菩提を得ることである、即ち若不生者の生にして往生即成佛の故に願往生心即願作佛心である、然るに大菩提心といはざるものは難行聖道の菩提心に混すること恐るが故である。心念阿彌陀とは上の長行の文には念我稱名自歸とある、是を承けて今心念といふ、上の人能念是佛の能念である、應時爲現身とは佛の因果の令我於世速成正覺の願作佛心、拔諸生死勤苦之本の度衆生が衆生の因果となる故に心念の中に佛爲に身を現すたまふ故に應時爲現身即入必定である、入必定の故に爲現身である、此佛即ち攝取不捨の佛である、攝取的の故に入必定聚即得菩提である、是を勸章には「攝取不捨の故に正定聚に住す、正定聚に住するが故に必ず滅度に至る」との九

まふてある此の如く彼此互顯して易行の菩提心難行と異なることを顯はす、是れ行卷御引用の思召である。

問 無量光明惠等の一偈を行卷に引きたまふは如何。

答 長行の念我の我を顯はす爲である、二卷抄に「我言盡十方無碍光如來」とある。

問 心念とは信心なりや稱名なりや。

答 一義に上に人能念是佛といふ彼の念とは念我を顯はす、是を承け來て願作佛心といふ、此願作佛心即心念故に信心清淨者等と承けて顯はしたまふと、又一義に願作佛心とは直ちに念我を顯はし、心念とは上の稱名を顯はす、此稱名念佛は願作佛心より起る、故に心念といふたものなりと。
彼佛本願力_乃是故我稽首、

□ 十方來勤

彼佛本願力の一句を行卷及び唯信文意の文點に依らば上に屬して彼佛の本願力を歸命するといふことになる、此時は心念阿彌陀等の第十八願を顯したものである、天親は之を相承して觀佛本願力等とのたまふ、是即ち諸佛を統ふる十八願である。又現流の本は下に屬す、此時は十方諸菩薩來て供養法を聞くといふは彼佛の本願力なればなりと示す意で、東方偈の菩薩の「令觀安養佛_乃其佛本願力聞名欲往生」と同トことである。
本願力とは餘の四十七を全して十八を擧げたものである、是は四十八を全ふするの十八願なるが故である。其他の文は解し易し。

彼土諸菩薩_乃我今歸命禮、

八相好具足

二百五十

二十二願の相好具足の願は他方來生の利益を示す、今は自國に約す、又上の第九偈は人天に付て咸同一類非天非人を示し、第十一偈は聲聞に約して非聲聞を示す、今は自國の菩薩に付て咸同一類相好具足を示したまふのである。文は解し易し。
彼諸大菩薩^乃是故稽首禮、

二供養諸佛、

此一偈は次下の疑則華不開を自ら引起す意がある、第二十三願の供養諸佛、及第二十四の供養如意の願功を顯す、日月とは迦才の淨土論には月は日の誤で日々としてある、小經に各以清旦とあれば日々三時の修行を述べたものである。文は解し易し。
若人種善根^乃華開則見佛、

本大悲普益、

初の二句は佛の悲化を擧げて方便を嫌ふ、後の二句は法の眞實を擧げて大益を嘆す、前は三經の方便を示したのである、化卷^{十五}に三經方便即是修諸善根爲要とのたまふてある。次下の二句は三經の眞實を顯はしたるのである、化卷^{十四}に「三經眞實選擇本願爲宗」のたまふてある。是を以て彌陀の易行を顯はしたまふたのである。

有人若人種善根の句を總句として、自力他力をいはず念佛を修するを勸む、念佛しながら疑へば華開けず念佛して信心清淨なるものは華開て佛を見奉る、是の如く自力他力を云はずして先念佛すべしと勸むるが若人種善根の意なりといふてあるが、此義甚た宜くない、若人種善根は信心清淨者に對す、清淨者とは行卷に清淨

者ヒトナと者を人者にしたまふてある。然れば上の若人に對したものは、
である、疑則華不開は華開則見佛に對す、乃て上の二句は方便を誠
め、次の二句は眞實を勸むると見るが當前である。

若人種善根を一義には十九願の諸行を種善根といふ、諸佛名號
此中に攝す、大經の胎生觀經の定散二善此中にありと、又一義には
善根とは植諸徳本、疑則等とは自力の稱名、疑と種善根と華不開と
を擧たまふたものであると、此二義何れもよろしい。

信心とは上に念我とあり能念とあり心念とあるも皆同トこと
である、清淨とは論註に一法句清淨句とのたまふと同ト。

問 何が故に稱名を擧げざるや、

答 願文に三信十念あれども十念は信心の相續、卷き收むれば
信に歸す、故に長行にも自歸とのたまふ、此義を示して願體は偏に

信心にあるが故に稱名を論じたまはぬのである。

華開則見佛とは、佛果を開かざれば自性を知見することが出来
ない、自性を知見することの出来るものは唯是信心清淨者の一因
である、然れば一因一果の法義を顯はすものが此一偈である。

十方現在佛乃我今歸命禮

へ諸佛稱讚

諸佛能讚の本意は唯本願にあるが故に前の一因一果を承けて
諸佛讚嘆を顯はす種々因縁とは法說譬說因縁説の三周をいふの
である。歎彼佛功德とは、歎は讚嘆にして他力を顯はし仰信せし
むるのである、是は淨土の眞面目である、聖道は開示悟入の解信を
主とす、佛功德とは諸功德此中に攝盡す、上に所讚でありし十方現
在の諸佛は今降て能讚となる、是彌陀本師の義である。

其土具嚴飾^乃是故禮佛足

別嘆の第三、三結二德起下文、此中二、イ土德清淨、**口**佛德清淨今は初である。

此一段上の二德を結するの文である、甚深味ふべきことである、是は第三十二の國土嚴淨の願文に依る其土具嚴飾とは願文の自地以上^乃嚴飾奇妙にして、殊彼諸天宮とは超諸天人である、功德甚深厚とは其香普薰^乃皆修佛行の文に當る。
佛足千輻輪^乃增益面光色頭面佛足禮、

口佛德清淨、

此二偈は觀經に依る、佛足千輻輪等は舉足時足下有千輻輪相^乃如佛無異の文を取り、眉間白毫光等は見眉間自毫者八萬四千相好自然當現の文に依る。觀經は觀行に約し、今は讚嘆に約したまふ

のである。

本求佛道時^乃頭面稽首禮、

別嘆第四、四因行を標して説法を嘆す、此中三、イ因行無量、**口**説法清淨ハ濟度無窮今は初である。

本求佛道時とは五劫永劫の願行を修したまふをいふ、經には積植菩薩無量德行等とのたまふてある行諸奇妙事とは大經に不生欲覺等と一々の行法を修したまふことの不可思議なることを顯はしたまふてある。此二句は全く大經に依りたまふたものである、又此修行の相は餘經にも説てある故如諸經所説とのたまふたのである、陳善院は此下に二義を設く一に諸經所説の一切菩薩の本願と二に諸經所説の彌陀因縁の行とを含むと。
彼佛所言説^乃我今稽首禮、

口說法清淨

彼佛所言説とは大經に班宣法時都悉集會とある、是は聖衆に付て説く、小經に今現在説法とあるが今の所説である。破除諸罪根とは一本に罪の字を羅に作れども今は罪がよろしい、罪根とは二あり、一には罪業即ち苦報の根本といふこと、是は持業に約す、二には造罪の根本即ち煩惱の事、是は依主に付く。

問 淨土に罪根なし何を破除等といふや。

答 一義に化土に約す、彼土は變易あるが故に、觀經の勢至觀に演説妙法度苦衆生とある、今は從假入眞に約すと、又一義に眞土を顯はす、唯是言詞を讚嘆するのである。又一義に眞土に局るに似たれども廣く十方土に通ずる、大經に大音宣布一切世間と説き、論註には梵響聞十方と示してあると、今は第三説を取る。

以此美言説乃至是故稽首禮

ハ濟度無窮

以此美言説とは前偈の美言多所益を承け來て示す、諸著樂病とは枝末無明、前偈の諸罪根は根本無明、今猶度とは此中に自ら小經の三發願を攝めて三世常恒の悲濟無窮を示したまふのである。人天中最尊乃至是故我亦禮

別嘆第五、五舉諸讚示絕言、此中三イ因人の咸歸、口二利圓滿、ハ果佛の劫讚、今は初である。

人天中最尊とは、大經には爲諸天人師と説き、十二禮には稽首天人所恭敬とある、大論二拜に「言天則攝一切天、言人則攝一切地上生者」とある。諸天頭面禮とは第三十七の天人致敬の願の意である。七寶冠摩足とは敬禮の至極を示す、一切賢聖衆とは大經の「彌勒菩

薩及十方來諸菩薩衆長老阿難諸大聲聞を今は一切賢聖衆といひ、一切大衆を及諸人天衆といひ、聞佛所說靡不歡喜を咸皆共歸命とのたまふたのである、此文に依りて五乘齊入の義を示したまふのである。

乘彼八道船^乃我禮自在人、

□二利圓滿、

此一偈は大經の「設滿世界火必過要聞法會當成佛道^{度自廣濟^{彼又度生}}」死流^海の意に依りたまへたものである、上の二道大判門の喩が爰に來て合し通易行を奪ふて彌陀の別易行となる船喩の合法で實に甚深の味がある。

八道とは正見、正思惟、此二は惠の部類である、正語、正業、正命、此三は戒の相である、正念、正定、此二は定の相である、正精進、是は定と惠

とに通ずである、此事は大乘法數四十八^十に出てある。經には積植菩薩無量德行と説て、因でいへば一切衆生の願行、果でいへば一句の名號、今は因に約して八道船とのたまふ、高祖は本に約して弘誓船又は難思弘誓とのたまふのである。

難度海とは能度の二字と乗の字とを相照してみれば他力の義が顯はる、難度海を経には生死流と説き、此論の序品には隨愛生死の相を廣説してある、我祖は序品と今文とを組合せて「生死の苦海はとりなし」と仰せられたのである。自度亦彼度とは法藏菩薩の心中の願にして十一と二十二の願作度生の二利である、上の若人願作佛も今と合せて見れば、上は願作佛心を顯はして度衆生心を隱す、今は生後であるから二利圓滿の相を顯はす、自在人とは大經に而得自在と説く、因中已に自在であるから果上は況んやで

ある。大論三十九六に「若聞佛獨尊自在者說法信受其語」また央屈摩羅經に我今稽首自在王」とある。
諸佛無量劫乃歸命清淨人、

ハ果佛の劫讚、

諸佛の讚嘆に付て大經に三あり、一には佛の光明を説く、光明威神乃尙未能盡、二には菩薩の功德を説く、我但爲汝畧說斯耳、三には十四佛國の菩薩の往生を説く、其往生者乃晝夜一劫尙未能盡、此釋尊の化は則ち一切佛の化である、一切諸佛が無量劫に上來明す處の三種の功德を説き盡すべからざることを結したまふのである。我今亦如是乃心常得清淨、

正明の第二偈說の中三ある中第三、三結示、此中二、イ結稱讚願自利、口舉所得結利他、今は初である。

我今亦如是の如とは五義あり、一に諸佛菩薩齊く此法を説くが故に二に齊く佛願に向ふ故に、三齊く利他の爲にする故に、四に齊く報恩の爲にするが故に、五に信後の讚嘆の徳諸佛に同するが故に是を以て亦如是とのたまふのである、是は龍樹ばかりではない今日我等も亦如是である。

稱讚等とは上に偈を以て稱讚したまふことで正くは廣讚である、高祖は唯能常稱等と略讚に約したまふてある。

以是福因縁とは上を承けていふ、即ち稱讚如實の行は信より流出する、其稱讚の根本無上の大切徳を具ふ、是を福因縁等と稱讚自爾の徳を指したまふのである、十二禮の所獲善根と同トことである、因縁とは鸞師の信佛因縁にして即ち無上功德である、願佛常念我とは上にいふ人能念是佛と同トことであれども、今は冥加を乞

ひたまふ相である。

我於今先世とは上の偈は只今世に約す、今は二世に約す、上は現益を乞ふ、今は當益を願ふ、大經には若人無善本とあり、今は福德若大小とある、大は今世に約して名號の無上功德、小は宿福小善、共に佛力なりと顯はしたまふのである。

問 小善を以て佛處に生んとは如何。

答 宿善尙ほ他力の上は今世の名號を回するの外なし、但し小とは宿善の當分を指す、今回向する處は名號を領する方に約するのである。

清淨は涅槃の四徳の中の一を擧げて餘の三を攝するのである、上來明す現當の益首尾相應トて彌陀本願易行の別徳を顯はしたまふのである。

以是福因緣^乃皆亦悉到得

□擧所得結利他

此一偈は十二禮の我說彼尊等の文と全く同トい、我說彼尊の二句は今の以此福因緣に當り、所獲善根の一句は今の所獲上妙徳に當る、回施衆生の一句は今の願衆生等の二句に當る、此福等とは名號である、此名號を衆生に回施したまふを願諸衆生類皆亦悉當得と願トたまふのである、是天親の普共諸衆生といふに同トい、善導の願以此功德等も是に依りたまふたものであらふ、此回向門は決して諸佛章に無き處、彌陀の別易行龍樹の本意なることが爰に顯はるゝのである、上來略して彌陀章を辨じ終る。

又亦應念毘婆尸佛^乃以偈稱讚

別辨の第二、二傍明諸佛菩薩此中二、一諸佛、二菩薩諸佛の中三、一

此土出世の佛、二他方現在佛、三總念三世佛、此土出佛の中に二、イ列名畧示、**□說偈別讚**、今は初である。

上の十佛章は從假入眞の相た、即ち彌陀章の爲の序分である。今は從眞垂假の相た、彌陀章の爲には流通分である。流通の中佛の次に菩薩を擧ぐるものは佛なき時は菩薩之に代りて流傳無窮なることを示すのである。

毘婆尸世尊乃無比妙法王、

□說偈別讚、文解易し

復有德勝佛乃以偈稱讚、

諸佛の中の第二、二他方現在佛、此中二、イ列名畧示、**□說偈別讚**、今は初である。文解易し、

無勝世界中乃皆令目得見、

□說偈別讚、文解易し、

復次過去未來云以偈稱讚、

諸佛の中第三、三總念三世佛、此二、イ略標、**□偈讚**、今は初である。文の如し、

過去世諸佛云我今頭面禮、

□偈讚、文の如し、

復應憶念諸大菩薩乃

二菩薩、此中二、イ畧示標名、**□結明行門**、今は初である。文の如し。如是等諸大菩薩乃阿惟越致也、

□結明行門、文の如し、

上來十住論の樞要たる易行品に付て至極粗略なる講述是の如

くである。

易行品論題科解釋義

一 選祖所由

科解

○龍樹爲本師_二一

七卷楞伽六十八一切佛彌陀國より出る故

一 依楞伽懸記故

一 依我乘故

唐譯七卷、魏譯十卷

二 廣開彌陀易行故、

大經華光出佛大經佛々相念

出門に對して入門を顯はす、終に五德に歸す前四は入、第五は出、

我乘内證智

妄覺非境界乃我乘大乘

彌陀の五智

彌陀智願海二乘非所測

聲聞菩薩

選祖所由

無上法證得歡喜地往生安樂國、

大乘中の無上、大經の無上功德をさす、歸阿彌陀生安樂國

○御文に八宗の祖師とは自他共許を希玉ふが故、

汎爾の言なり、流布語を守る、

釋義

問 八宗の祖師たる龍樹を今宗の祖師となしたまふ所以は如何。

答 一には依楞伽懸記故、二には廣開彌陀易行故、

一には依楞伽懸記故とは楞伽經に曰我乘內證智。妄覺非境界。如來滅世後。誰持爲我說。未來當有人。於南天國中。有大德比丘。名龍樹菩薩。能破有無見。爲人說我乘。大乘無上法。住初觀喜地。往生安樂國と説きたまふ。此文に付て本宗の祖師とするに二の見込あり。一に依我乘故、二に歸安樂故、然るに他宗にあ

りては生安樂國を會通して、大乘無上法とは三論なれば三論の法眞言なれば大日の自内證の法を指したものとて各祖師とす。往生安樂國とは唯心己心の淨土に往生したまふものにして決して心外の淨土に非ず、己が心より現した淨土に至りて己が心性を磨き出したまふをいふと。今彼の文を伺ふに内證智は彌陀の五智、妄覺等とは二乘非所測をいふたものなり、其二乘は聲聞或菩薩の二乘にして聲聞緣覺を指すに非ず、我乘大乘無上法とは念佛三昧なり、乘とは明信佛智なり、何を以て念佛三昧なるを知る、曰く我乘の法なるが故に、即ち釋迦の乘したまふ處は彌陀念佛なり、何となれば七卷楞伽六十一に十方諸刹土、極樂界中出とありて、諸佛は皆是極樂界中より出現したまふが故に是即出門なり、是よりみれば今の我乘は入門にして所謂般舟經の三世諸佛依念彌陀三昧な

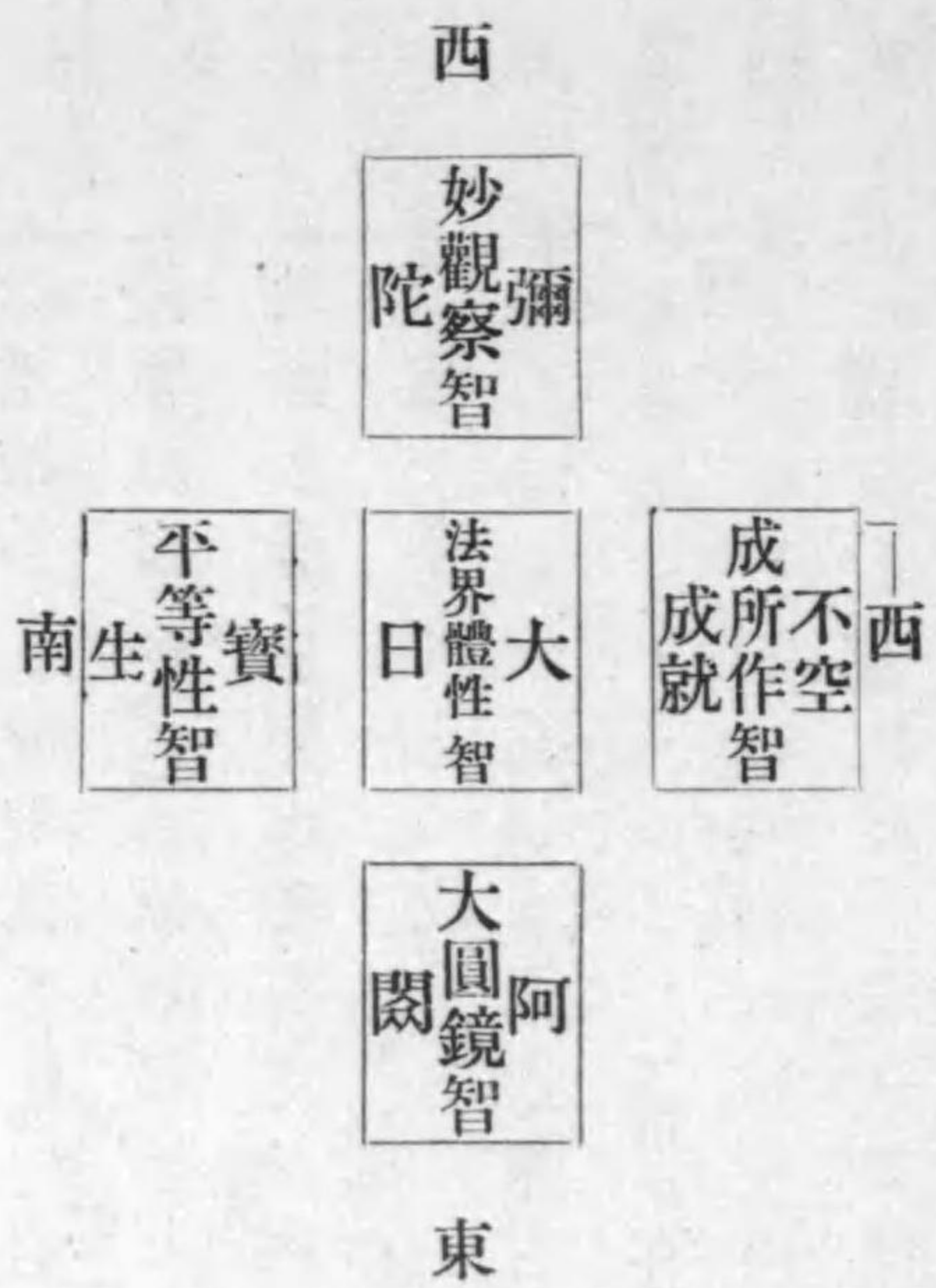
り、是を大經でいへば華光出佛は出門、佛々相念は入門にして終に五徳に歸す、五徳の前四は入第五は出なり、是の如く釋迦の乗したまふ無上法に龍樹は依りたまふものなれば、彌陀に歸して安樂に生じたまふこと必然なり。次に懸記の文では因は如何なる法か明ならず、然るに果を生安樂と出したまふよりみれば、彌陀願力に乗したまふこと必せり、喩へば苗の時は稻稗の分別しがたく、果實にて始て分明に知るゝが如し、故に鸞師は果より因を推して讚偈に「本師龍樹摩訶薩」^乃歸阿彌陀生安樂とのたまふ。

二には廣開彌陀易行故とは、下に至て可知。

問 蓮師の八宗の祖師とのたまふは如何。

答 諸宗の祖師といふことに非ず、科解の如し、眞言に付て龍樹殊に西方願生する所以を解さば、彼の宗では五智を立つ中、妙觀察

智は出離の法の入口とし、其智を彌陀に配するが如し。



二 傍明正明

科 解

選祖所由

○傍明論

文の多少に依が故、
所釋の經に准するが故、

選擇法を隱すが故、諸といふが故、
權假方便故

○正明論

捨難歸易を説が故、
龍祖の自歸を顯が故、

一論に合するが故、
唯眞實故

△選擇集

衆機を誘引するが故、
恐慮を存するが故、

鸞師を引が故、
爲傍存正故

△文類偈

論主の正意に依が故、
懸記の佛意に依が故、

智論に合するが故、
爲正存傍故

釋義

此十住論は或は傍明論となり、或は正明論となる、先づ傍明論と

なるは一には文の多少に依るが故に、曰く傍正分明ならざるが故に、文の多少を見るに易行を説くは第九の一品のみなれば傍明なり、二には所釋の經に準するが故に、曰く所釋の經既に傍明經なれば能釋の論亦然るべし、

問 然らば正依の三經を天台等の諸師釋する時は彼等も所釋の經に準して正依論とするや。

答 能釋の上が所釋に准すると准せざるとの二あり故に一概すべからず、已に准せざれば佛意を失するもの故に所釋の經と同時に扱ふこと能はず、今は然らず、所釋の經は傍明經なり、夫に准して一部を押へて十住毘婆娑論と題して之を明したまふが故に傍明論なり。

次に正明論と見るに又二あり、一には捨難歸易の故に、曰く難易

大判したまふは難を捨て、易に歸せしめんが爲なり。

問 然らば除業品の易行品の次品に流るゝ機なかるべし。

答 未熟の機は上の易行を求むるは憊弱怯劣にして大心あることなしといふ處に止つて難易大判の意を知らざるが故に除業品に流るゝ機あるなり。

二に龍樹の自歸を顯はすが故に、曰く彌陀章の終りに自利利他を以て結したまふ是なり、是を以知る龍樹の正意彌陀易行にあり、然らば前後に廣く十地難行を説くは難行の難たるを知らしめ以て捨さしめん爲なれば此論一部は彌陀易行を明すにあり、故に正明論とす、是の如く十住論は或は傍明となり、或は正明となる、傍明の時は權假方便の位なり、何となれば選擇本願の面を出せば傍明すること能はず、日輪の夜行すること能はず、天子の食客たる能は

ざるが如し、苟も日輪至れば晝となり、天子至れば行在所となる、選擇本願の顔て説けば何程餘行を説くとも皆所廢となりて直に正明論となる、故に傍明の時は權假方便の位なり。又選擇集傍明の處には明諸往生淨土之諸論是也とありて、正明の處には諸の字なし、是諸行を以て淨土に往生することを明すの諸經論といふたものなり、正明とする時は唯眞實なり、何となれば選擇集に正明往生淨土之教者三經一論是也とのたまふ、三經に一致差別二途の取扱あれども、顯眞實論に合して明したまへば三經一致の邊にして唯眞實を以て正明とすること明なり。

上の如く今論二途ある中、元祖取て傍明としたまふに二意あり、一には諸機を誘引せんが爲の故に曰く傍明としてをけは聖道の者之を讀で不知不識彌陀易行に歸する故に、二には恐慮を存する

が故に、曰く易行の中に通別あり、若し之を直ちに正明とせば分別なく都て易行は所立と取るを恐れたまふが故に、此二意を以て傍明中に攝したまふ、高祖は文類偈に正明としたまふは如何といふに、一には論主の正意に依るが故に、二には懸記の佛語を尊承したまふが故なり。然るに古來高祖の上亦傍明とする意あり、讚に智度十住毘婆娑等と智論に合して取たまふが文に云々、今伺ふに彼文正明としたまふ邊なるべし、然らざれば、ス、メテ念佛セシメケルとある念佛は自力とするや他力とするや可思擇。又智度論によるの三首中に「念佛三昧行シテ」とあるは、自力念佛とするや然らざるべし、然らば讚は龍樹の正意より取て智度論までを弘願念佛を勧めたまふと取扱ひたまふものなり。

三 易行興起

科 解

易行興起二

一 出於所釋經三

一 所釋經總括一代故

一代經王にして難、易行は經の究意に存せり、元は大經に依る

二 華嚴兼舍終歸淨土義故

樂集上三十二第二大門に出す、

三 欲彰諸經終歸在西方故

普賢願生より取る、要集上七末引く

經の密意(易行)を開顯するが故、彼の經文より取る

步船抄四丁此意なり、

二 興於上諸品四

一 承釋願品故、

論三五丁以諸佛本願因緣二事和合二故乃至或開佛名入三必定一者、又六丁佛有本願若聞我名者即入必定等

論四九敗壞轉進の二を擧ぐ、

二承阿惟越致品故

第八品は所得の果に約して阿惟越致と名く今は能得の因に就て易行と爲す、

三承入初地品致

論一丁七に初發心事即入三必定乃至初發心時、不レ入三必定一

四承序品故

論一丁若人欲以無上大乗二度生死大海上

釋義

易行の興起を窺ふに二あり、一に所釋の經に出づ、二に上の諸品より興る、一に所釋の經に出づるに三義あり、一には所釋の經一代總括するが故にとは、華嚴は是經王なり何となれば彼經には日出高山の喩を擧げて經王なることを顯はす、又大經には得佛華嚴三

味と一代を華嚴に攝めて以て大經の序分としたまふ。

問 經王とするは彼の宗の所談にして諸宗の許さざる處なるべし。

答 然らず三論に在ては三法輪を立て、華嚴を根本法輪とす、天台に在ても華嚴は圓に一別を兼ねる純圓獨妙は法華に在りと談ずれども而も圓體は無殊と談ず、又天台も華嚴に一代を總括することを許すべし、何となれば五味を立て、約機濃淡約法相生といふが故に、華嚴より一代を生ずといふ、如是華嚴の一代を總括することは諸宗の許す處なるが故に、今此華嚴に依て難行の難たることを顯はして易行に入らしむるなり。

問 何ぞ易行を聞くを得るや。

答 華嚴を大經に照してみれば十地の法を説くは難行の難た

ることを知らしめ以て易行に入らしむるの佛意あるが故に今其佛意を開顯したるものなり。

問 龍樹が其意なりとは何を以て知るや。

答 華嚴經中彌陀のことを説きし處もあるに、其處に依らず、彌陀の事を説かざる十地中に於て之を顯はしたまふが故に、云く地前は四十位あれども一阿僧祇にして之を修する、初地より七地迄一阿僧祇を経る、然らば難の難たるは此十地にあり、其中に殊に難なるは初地にあり、退不退の境なるが故に、八地已上は殊に長けれども初地以上になれば不退位の故に退轉の憂なく、今其不退を得んとする處なるが故に甚だ難なり、今品は初二地の間なれども、初地を得るの法なるが故に未だ不退位に入らざる時に行するものなり、如此難中の難處に於て之を開きたまふ處よりみれば、華嚴は

一代を總括して難行を説くが故に、之を大經に望めて佛意彌陀易行に入らしむるにあることを開顯したまふものなり。

二には華嚴は終歸淨土の義を兼含するが故にとは、彼の經の壽命品に極樂淨土を初門とのたまへ以て易行を示したまふ、是終歸西方の意なり、故に樂集上誨第二大門中に彼の文を引て是故諸佛偏勸也とのたまふ、是を以て龍樹易行を説きたまふものなり。

問 然らば壽命品に依て明すべし何ぞ十地品に依るや。

答 上にいふ如く難行に對して之を明す、極難は十地にあるが故なり。

三には諸經の終歸西方に在ることを彰はさんと欲するが故にとは、四十華嚴普賢行願品に於て西方願生を説きたまふ、然らば華嚴の終歸西方願生にあり、華嚴の終歸即諸經の終歸となる、何とな

れは一代經を總括するが故に。

問 普賢の願生は大經中に三輩を説くが如く、觀經に頻婆娑羅王の阿那含を成するを説が如くにして、未だ以て華嚴の終歸西方願生にありといふべからず。

答 彼と同一に解すべからず、普賢は華嚴に在て上首の菩薩にして、尙は大經に在ては彌勒の如く、觀經に在ては韋提の如く、此菩薩華嚴を説き佛之を印可したまふ故に、六大菩薩の説即ち佛説なり、今菩薩は西方願生を説くを司りたまふ、普賢已に然れば餘の菩薩の意亦然るべし、佛已に印可したまへば佛意亦然るべし、故に華嚴は終歸西方願生にあり、故に今此極難を顯はす處に於て其終歸を明したまへしものなり。

二上の諸品に興る所由ありとは、此に四あり、

- 一に釋願品を承くるが故にとは、彼中に、佛有本願若聞我名者即入必定といふ、其本願未だ説かざるが故に、今爰に來て之を説すんはあるべからず。又第四卷に敗壞の菩薩と漸々轉進の菩薩とを説く、漸々轉進の菩薩の爲には上に難行を説けり、然るに未だ轉心の菩薩の不退に入るの法を説かざるが故に、此品に來て説くなり。
- 二に阿惟越致品を承るが故に、曰く阿惟越致に至るの因は稱名易行迄説すんは盡きず、何となれば佛經已に然り、次下に引く寶月童子所問經阿惟越致品の中に稱名易行迄説が故に。
- 三に入初地品を承くるが故に。曰く初發心の時不退に入るの機と入らざるの機とあり、入らざるの機の爲に必ず此易行を説すんはあるべからず。

四序品を承くるが故にとは、曰く隨愛の凡夫をして生死の大海

を超越せしめん爲に此十地の法を説くといふ、其十地難行に堪へかね生死の大海を出ること能はざる機あり、其機の爲に今易行を説く上の諸品を見るに今品興らずんばあるべからざるの義此の如し。

四大判二道

科解

佛法有無量門二

一 無量中難易——所期不退の難易の故

一往

一 合水陸二道故

二 依論註故

二 無量即難易四

再往

三 依選擇集故

本十六丁

四 依化卷故

釋義

難易二道の判を窺ふに、一往は無量中の難易にして再往之を伺へば無量即難易にして一代を二道と判釋したまへしものなり。

一往の義は文の顯相に依るに阿惟越致を求むるの難易なるが故に一代を大判したものに非ず、所以は佛法無量門中には直に佛を期するの法あり悟念願又不退を期せざるの法あり乘二然るに今不退に至るの法に難易二あることを顯はしたもののなれば大判に非ず。

問 然らば佛法有無量門の語不用をなす、問者は易行を顯はす

爲に乞たもの故に、直ちに之を説きたまへて可なり、然るに今當説之といふて次に端を改めて佛法有無量門といふもの大判の思召なるべし。

答 然らば問者も恐くは易行はなかるべしといふ意なれども若萬一あらばといふ問なり、夫に應て憊弱怯劣にして大心あることなると貶斥するは不退に至るは十地の法よりなきといふ程の勢なり、堅心の菩薩なれば必ず然り、其意を以て初に呵責し猶聞たくは説くべし、佛法有無量門の故に難なる法もあり易なる法もありといふたものなり。

再往之を伺へば無量即難易なり何となれば四義あり。

一には水陸二道に合するが故に曰く世間の道は水陸の二より外になし、之を合する難易なるが故に一代經を二道と判つたまへ

しこと明なり。

問 不退を所期とする難易ならば一代を大判したまふといふべからず。

答 不退を求むる處で一代を難易と判つたもの、是れ初地に至るのみが難なるに非ず、初地に至るが難なれば二地より十地に至るも難なり、然らば華嚴は經王なるが故に一代經を此中に攝し、極難たる退不退の境に於て聖道一代は難とし、易行の易行たるは獨彌陀にありと大判したまへしものなり。

二には論註に依るが故にとは、曰く論註の初に謹按等と此文意を述べたまふ處に菩薩求阿毘跋致有二種道と無量中の難易の如く見ゆれども、其正意は大判二道とするにあり、何となれば此二道に依て自他二力の判をなすが故に。

三には選擇集に依るが故にとは、曰く集に聖淨二門に合したまふが故に一代を大判したまへること明なり。
四には、化卷に依るが故にとは、曰く化卷本に難易聖淨を合して一代を判釋したまふ。

五 易行通別

科 解

易行一往通諸佛再往彌陀易行。

信即方便々々即易行は諸佛必ず別時意なり

諸佛章寶月經の如し、信方便易行も通ず

縱門通諸佛 一義に別時意とす、一義に成佛別時意不退は

直至とす、前義を可とす○封執の機をして別易行に轉入せしめんが爲の故に。

- 一 總讚別讚の異、
- 二 乘船有無の異、
- 三 能讚有無の異、
- 四 本願有無の異、
- 五 回向有無の異、

釋 義

易行は一往は諸佛に通ずるとは文面已に然り、然らば方便といふ迄諸佛に通ずるや、曰く然り、若方便法身を信ずるとせば別途に局れども、信は不退に至るの方法便術とせば、信即方便々々即易行にして諸佛に通ず。

問 信方便が即易行と云ふことなれば、信方便易行とは信なり
信方便は信、易行は行と云ふべからず。然らざれば、唯信にして不退を得るや。は、勤行精進は信、難行は行と云ふべからず。然らざれば、唯信にして不退を得るや。

答 彌陀に在ては唯信往生を許すとは無論なり、已に彌陀章に在りて念我稱名と十八願の三信十念を出し、而も自歸即入必定と念我の處で必定に入ることとを明し、偈頌にも人能念是佛と唯信で必定に入ると顯はす、然るに諸佛に在ては然るを得ず、何となれば願行具足せずんばあるべからざるが故に、然るに唯信にて不退に至られる様にいふたは別時意なり。

問 然らば願行具足せずば別時意に非るか、若然らば次に「應以恭敬心執持稱名號」と心行具足が不退に至らんと欲するものなれば別時意に非ず、今は其行を信に攝して略して標したものに就いて諸佛の聞名不退は別時意といふべからず。

答 一行即一切行の稱名なれば直至なり此稱名を具するとせば難行にして易行に非ず、何となれば諸法融會の理より稱名不退と云ふたものなり、然るに機は差別に止まるが故に其融會を知らず、之を知らんと欲せば矢張三祇百劫かゝらねばならぬ、故に難なり、然るに易行といふたは一行即一切行の理より稱名不退を得るといふたものにして、衆生之に契ふ能はざるが故に別時意に流る然らば明に知んぬ此信方便易行は唯信で不退を得るといふた文故別時意なり、若稱名を具するといふとも融會の所談にして別時意なり、彌陀の本願は然らず、差別の機なるが故に差無差無礙のものを差別の方で應下、差別より無差別に入らしむる故に易行にして而も直至なり、諸佛は差別の機に無差別の法を與ふが故に、其法に契はんとすれば久乃可得にして難行なり、易行とすれば別時意

なり、深く思擇すべし。
再往彌陀に局るの五義は科解の如し。

六 易行名體

科 解

一名義 一難の行、易の行の依主釋……約機

二行即易、行即難の持業釋……約法

讀易行品に易は不難の稱、行は造修の義なりと、玉篇に易は不難なり、輕易なり、簡易なり、樂易なり、平易なり。

○難行は華嚴二_{十六}世間淨眼品に依る、易行は大經の易往而無人に依る、經は約果、今は約因。

二出體。

信方便易行 一約信心謂信即方便々々即易行

二約念佛謂信於方便之易行

釋 義

名義は上の如し。

問 難易は機の堪不に付ていふたものなりや、又元來行體難易あるものか。

答 行體も難易あり、上に諸行難行といふ、假令難行に堪ゆる機ありとも矢張難の行なり。恰も灸に堪不はあれども火の熱さに異なるに非ず。行體に難易あるが故に能修にも亦難易あるは必せり、往生要集の初めに「利智精進之人未爲難」とあるは機の堪不に付ていふたものなり。

問 難易の名は何にて立てしや。

答 能所相依た處で立たものなり、行體難易といふも能行を見ざるの所行なきが故に能行の方で難易といふも亦然り。

出體

問 易行の出體如何。

答 或説に稱名に局るといふは不可なり、次に辨ずる處を以て知るべし、此義は一に略典に「稱名號疾得不退」のたまふが故に、二に難行に對するが故といふ意なり。今先輩の説に依て伺ふに三義あり。

一義に信心に約す、信即方便々々即易行なり、信を指して行といふは、行の言信に通ず、故に論註に三不を明し終て、與之相違名如實修行相應是故論主建言我心とのたまふ、信方便即易行にして信受奉行其の法の如くなりしを云ふ、強ちに衆生の方に造作にかゝ

らざれば行と云はざるに非ず、無造作にして助くるといふ其法の如く無造作になりたが奉行なり可知、是は論註の「言易行道者謂但以信佛因緣願生淨土」のたまふに依る。

一義に念佛に約す、方便を信ずるの易行にして、方便とは方便法身の誓願なり、此誓願を信トた信より流出した稱名を易行といふたものなり、彼の難行に對するが故に能行の方でいふたものなり。上の二義は何れも彌陀章に其意あるなり、初義は人能念是佛等とあるに依る、後義は略答の應恭敬禮拜稱其名號と稱名て勸發したまふに依る。

問 初義に問ふなり 信心を何ぞ易行と名くるや。

答 信心は是往生の行なるが故に。

問 信は無造作のもの行は造作なり、然らば信に行と名くるを

得ざるべし。

答 信は佛の造作を我造作としたものなるが故に、喩へば人力車に乗ずれば無造作なり、然れども車夫の造作進趣を即我が造作進趣して居る相なり。又解して曰。信心を易行といふたは結歸した處をいふ、行とは稱名なり、此稱名は信海流出の故に元に結歸して信方便といふたものなり、例せば寶章に「正行ニ歸スルトイフハ彌陀如來ヲ一心一向ニタノミタマツル」とのたまふ結歸していふたものなり、今亦然り、二義何れも可なり。

問 後一義に問ふなり 稱名で不退に至るとせば稱名正因に非ずや。

答 決して稱名正因に非ず、正因は飽迄信心にあるもの能稱を待つて往因究竟するに非るが故に、然るに今稱名の處で不退に至るといふたは信を稱の處で寄せて云ふたものなり、信海流出の稱

名なれば信行不離の故に稱名の處で不退に至られるといふたものにして、能稱に果を引く用あるに非ず、喩へば提燈明しといふが如し、提燈に闇を破すの力用あるに非ず、中の蠟燭に其力用あるものなり、然れども中に火のある提燈なるが故に提燈明しといふことを得、今も信のある稱なるが故に稱名必得生といへるが、而も果を引く力は信にあるなり、然らば稱名必得生といふが信心正因を顯はしたものに於て稱名が正因といふに非ず。

問 信が口に顯はれて稱となりたものなれば、稱を押へて即信といへるや、若然らば稱名正因と云はるゝ乎。

答 不離より不二に達するが故に稱名を押へて即信といはるゝ、信の全體の顯はれた稱名なるが故に、然れども稱名が正因といふことに非ず、所以は稱となりたで正因といふに非るが故に、若報

謝の稱名なれば信が稱と顯れたで報謝となるといふべし、信は稱とならずとも、正因なるが故に、何程稱の處でいふても稱名正因に非ず、喩へば水波の如し、水と波とは體と相となり、故に不離、不離かと思へば波即水の故に不二なり、不二の故に波よく物を濕すといふ濕す力用は相にあるに非ず、水體なり、物を濕すは動靜に拘らざるが故に可知、然れども物を動搖するは波となつた故なり、報謝の行は是の如し。

問 信行不離不二の故に稱名で不退に至るといふを得れば其邊では稱名正因の目を施しても可なるべし。

答 不可なり、何となれば名は義を詮顯するものなり、稱名正因の目を下せば能稱正因を簡去すること能はざるが故に、其實義を詮顯せず、若義の如く名くれば信心正因なり、何程稱名の處で談す

るも夫が信心正因を詮顯したものなり。

問 所解の如くなれば信方便は信、易行は稱名、然れば上の勤行精進は信、難行は行とするや、決して然らざるべし、然らば今も信方便は即易行なるべし。

答 然らず、初に有難有易と名を列ね、或有勤行等とは出體したものなり、然らば信方便易行は出體故に易行は稱名と解す、若し名なれば難の名も出すべし、難の名なきは上に名を列ね、今は出體の故なり、可思。又初義の信方便即易行と解す、義では上の處に難行となきは具略の異のみと解す。

問 上來の二義中何れを論の當分とするや。

答 何れも當分の義なり、何となれば彌陀章の所明二途あるが故に。

問 然らば選擇集に稱名必得生と信疑決判と二途あるが故に初の念佛爲本とは心念稱念の二途を文當分の解とするや。

答 選擇集は本願章に念聲是一と談して稱念に取りたまふが故に何程信疑決判すれども標の念佛爲本を心念といふべからず今は不然、信とも稱とも二途に見らるゝ文なるが故に。

問 今難行に對して易行といはば能行にして稱名をいふたものなれば、何程彌陀章に信疑得失を明すと雖も、直に之を信心に約することを得ざるべし。

答 行は稱名に局らず、信にも行といへるが故に、今二途とも當分とするなり。

七 海徳分齊

科 解

一 來由 寶月經精進吉祥佛、樂集下^三要集下本^四所引、東方善徳佛、今云海徳○今日今明之者、一順所依經故、二爲開下問端故

二 釋名 華嚴五十三見佛出世間號曰初徳悔、又二十七、大海功德佛○海徳者、性如海、論註上^一言性者是必然義、如海性^乃改也

一 彌陀の化身、口傳鈔、楞伽經、

二 彌陀の弟子、口傳鈔、法事讚、般舟經、

彌陀本師の功德

三 相承 一行卷所引

三 彌陀即海徳 二 楞伽懸記に依る

光壽海の功德の義

三 地相品より照す

般舟三昧大論に念佛大悲無生を父母とす

伺行卷意五

- 一 依所依經……………西明に准す
- 二 依論註意……………懸記に依る
- 三 照前後……………入初地品
- 四 依當文……………光壽無量故名阿彌陀に准す
- 五 依道理……………一佛々平等故、二互本佛故、今彌陀とす

釋義

講義及び論題蹄筌に出るが如し。

八 西無眞假

科解

一 西無與彌陀同

依行卷所引意

童子經何洩彌陀易行之義耶、

經には西方歡喜世界吉祥佛云云

二 佛別異

准小經故、諸佛所護念經說五個彌陀故、

依善導指南故、不出國名故、依略記故、

讀易行品

彌陀章

十佛の列に付くが故に(方便)

三 亦別亦同

發明錄 假即眞故(約體)

行卷十佛易行の名を標するは簡別

西無は融會、又十佛共に融會と執持

稱名號を彌陀に奪ふが故に、海徳を彌陀に奪か故に、

略書等の執持は斷章取義今と別なり

行諸可得九佛^{十九}西無^{二十三}願轉入にして別易行に入る相

今日日本末四門を以て宜く解すべし。

西無眞假

本末差別……………別
 本末無碍……………同
 從本垂末……………十佛章は彌陀章より開くる、下の諸佛章に例す。
 從末歸本……………十佛章より彌陀章に入る。

釋義

大體は講義及び蹄筌の如し。

問 行卷は何ぞ彌陀としたまふのといふや。

答 十佛の中殊に西方無量明の一佛を擧るが故に、若し一佛を擧げ餘を攝することなれば初の善徳佛を擧ぐべし、當品四善徳の下で廣嘆して結び、餘の九佛の事は皆亦如是とす、又樂集下三所引の觀佛三昧經も善徳の一佛を擧げて餘を略す、然るに行卷は殊に第三の無量明を擧ぐるは即彌陀として大行の證としたまふもの

なり。

問 簡去した十佛中殊に相似の佛を出して、相似の佛すら簡去す況んや餘佛をやの意なるべし。

答 此難快く會し難し、故に二道大別の文より引て難行は簡去す、其易行の中で十佛易行は簡去するといふことを顯はさんために「若人疾欲至乃中説」とのたまふものなり、然るに和讃略典は執持稱名は彌陀とす、今は不然、彼は斷章取義、今は十佛の名號を稱すべしといふ長行の文と組合して引くが故に彌陀なりといふは既に論するが如し、然し今の難を出に至ては少く通し難し、今一步を進めて解さんに和讃略典の御指南に依れば執持稱名號は彌陀とす、是彌陀章より融會していふたものなり、豈法の融會に止まらんや、佛も亦然り、何となれば口傳鈔及證卷の初の文に依る、然らば本

末無碍の邊より十佛まで彌陀に都會して大行の證としたものなり。

問 然らば何を無量明を擧ぐるや。

答 是れ方處同の故に、名相似たるが故に、此一佛を融し夫より善徳を擧げて餘を略し、善徳すら融會す況んや相の佛をやとしたまふなり可考。

九 諸佛易行

科 解

舉十佛三

一爲堅心菩薩隨彼所好誘彼故先舉諸佛易行

一爲彌陀易行之弄引故二

二爲顯彌陀易行特秀故

三爲顯所釋經故

二爲輒心菩薩爲叩出機故、

不堪の易行を興へて終に弘願の機を顯はす、然るに未熟といふに非ず、機を調ふる爲なり、或は堅心の中に難に止めて易に入らざるあり、易に入るあり、或は輒心にして諸佛易行に止まるあり、彌陀易行に進むあり、可知、

所釋の華嚴經中に此土入聖の法を説く故に不退豈彼土に局らん、易行此土の益を説くべし故に晋華嚴三十七壽命品に一切諸佛十種の法を説く中第六に一切諸佛常以名號爲衆生而作佛事と今童子經に合して之を明すのみ
○諸佛易行を爲別時意者敬信錄二丁十法華及荆溪の釋を引て決判せり

釋 義

一 彌陀易行の弄引の爲の故にとは十佛易行は彌陀の易行を説
んための弄引なり。

問 上の呵問顯機は全是機實を顯はすにあり、機實已に顯はる
ゝ時は宜く法實を説くべし何ぞ弄引を用ひん。

答 機の通別あり、此處に堅心の菩薩にも熟未熟あり、未熟の機
は軟心の菩薩の爲の説と見る、純熟の機ならば同トく不退に至る
に易行あれば難行を捨てゝ易行に歸すべしと思ふ、又軟心の菩薩
の中にも熟未熟あり、未熟の機ならば十佛章に止まり、純熟の機な
れば十佛章では不足故、尙ほ重ねて問ふて彌陀章に至りて満足す
そこで呵問顯機の處未熟の機なれば難行不堪と思へども、尙ほ自
力の執全く除けず、故に十佛章を説て弄引す、純熟の機なれば難行
は勿論諸佛易行は不堪、然れば稱名不堪を顯はさん爲に法を與へ

て遂に彌陀易行を與ふ、未熟の機よりいへば法を機にあてがうた
もの、然らば未熟の機に約せば弄引、純熟の機ならば擬宜廢立の所
明となる、故に諸佛易行已に不堪の機なればも諸佛易行を與へて
其の不堪の機なることを顯はしたもの可知。

問 十佛章は誘引の爲といふべし、然れども此土出現の諸佛易
行は彌陀章の後なれば誘引の爲といふべからず。

答 二三の所由にて可知。
二三は蹄筌に讓る。

十發問生起

科 解

第二の問の發る所以如何。

○一に曰く、十佛にて事足る、但し此外に易行なきや、止息の情なきが故に、況んや十方佛の外海徳の易行も此餘にもあるべし、十佛易行に堪ふる機に約す、下に諸佛菩薩の易行及び除業品を開くの意より解する。

○二に曰く、十佛易行は不足なるが故に問を起す、前の對判門、遠くは序分釋題品より起る、龍祖の本意、彌陀易行によるの義より伺ふ下に彌陀易行論主自歸の廻向の本意より伺ふものなり。

釋義

講義に就て可知。

十一 一百餘佛

科解

約文、一義無量壽佛は諸佛なり、

小經及横川略記、要集に依る、羅什は梵漢の異を以て彌陀の本末を分つ、衆經目錄には無量壽經一卷一名阿彌陀經羅什の譯とす、

行卷の御訓點に依る

約義一義無量壽即彌陀佛なり有五由

- 一 應前文故
- 二 例餘佛章故 ○一百餘佛能讚佛とす
- 三 無勸發故 長後偈頌於文始顯光壽二徳於中間示故名阿彌陀之義
- 四 無敬禮故
- 五 不別章段故

釋義

蹄筌の如し

一百餘佛

十二念我稱名

科解

「信念」聲稱

念我稱名

「我名」「名號」

願文に依て云我故異譯に聞我名號正依に欲生我國十七願に我名

成就に依て云念故成就に信心歡喜乃至一念下に心念阿彌陀

稱とは十七願の所念名の故に能念豈稱ならざらん名は我と互顯我名を念し我名を稱ふればなり

自歸二義

一には念我稱名を指す、承發問生起の文故に、信行總論するが故に、略書の偈に依るが故に、和讃に依るが故に

二には信の一念を指す、成就の從多向少に依るが故に、偈に人能念是佛と云ふが故に、信心清淨者

といふが故に、論註に信佛因縁とするが故に、正信偈に憶念彌陀等とのたまふが故に、

○念我稱名は總論門を主とす別論門は偈より伺ふ處なり。
「信行」「信行」

六要本二十七稱名自歸入必定等と云念我を特に略する者可思

對判門の處選擇集第一第二章の如し 彌陀章長行如本願章念佛往生 偈頌如第八三心章別論なり

釋義

此文は願文及び成就を取合したるものなり、念とは心念、是成就の一念を取て以て本願の三信即一の義を顯はす、何を以て心念なることを知る、云く次に心念等とのたまふが故に、我とは異譯の願に於ては聞我名號と正依には欲生我國とのたまふ、又十七願には稱我名者とのたまふに依りたるものなり、次の名と互顯にして我名を念す

るといふことなり、稱とは十七願の名は所念所稱の物柄なるが故に念我稱名とのたまふたものなり、然るに不退に至るは念我の處なるや否やといふに、次の文に自歸即入必定とのたまふ、然らば上の本願の三信十念を顯はし、元に戻して自歸の處で即入必定とのたまふたものなれば是信の一念なり、故に高祖は正信偈に「憶念彌陀佛本願等とのたまふ。論文直に何を以て知るとならは次の偈に「人能念是佛」のたまへて更に稱名の沙汰なり、應時爲現身とは攝取の佛をいふたものにして即必定に入りしものなり、所以は如何となれば行卷ハ地相品御引用の文に初地の菩薩多歡喜なるを釋して「常念如是諸佛世尊如現在前、三界第一無能勝者是故多歡喜」等とのたまふ、以て知るべし、然らば今論は是念我の處で不退に至るといふたものにして稱名は位十七願に同トたまふ、所以は次下

「ハ」に「諸佛無量劫讚揚其功德」と十七願の讚嘆を舉げて、次に「我今亦如是稱讚無量德」とのたまふが故に、念我稱名と三信十念并べ明したまふと雖も自歸に戻て不退に入るとのたまへしことを知るべし、然るに略典の偈に「稱名號疾得不退」と、又和讃に「不退ノクラ井スミヤカニ」等とのたまふ御指南に依れば今論又其義あり、曰く上の略答の處に「稱名一心念亦得不退轉」とのたまふ、夫を承けて「應恭敬禮拜稱其名號」とのたまふ、是より今文を伺へば念我は稱へこゝろをいふたものにして稱名で不退に至るとのたまふたものなり、然らば自歸とのたまふたは如何といふに、是は念我稱名の本願に歸すれば即入必定とのたまふたものなり、然らば彼の難行に對して信行總論して稱名の處で不退に至るとのたまふたものなり、高祖の御相承に二途あるが故に今論も亦此二義なくんばあるべから

す。

十三 所期不退

科解

「六要二本」丁七に云云

- 一 現生不退
 - 一 正信偈に依が故
 - 二 自歸入必定故 念我の益は必定稱名の益は十七願讚揚等
 - 三 小經の語に依るが故
 - 四 信心正因故 下に信心清淨者心念阿彌陀等
 - 五 速疾至極故
 - 六 諸佛の此土不退に對するが故

二 含畜彼土義

- 一 依論註故
- 二 偈に不更惡趣の相あるが故 「要集不退樂の下に引く」
- 三 彼國大菩薩といふが故
- 四 示不共巨益故
- 五 顯往生淨土故
- 六 對難行顯益故

問 密益なれば所期とすべからざるに似たり如何。

答 往生即成佛の義を顯はすが故に。

釋義

今論は正しく現生不退にして彼土不退の義を含蓄す、此正しく現生不退とは高祖の御指南に依る「憶念彌陀佛本願自然即時入必定等」

所期不退

と稱名は却て入必定の後に廻はしたまふ、然らば是現益なり、今直に之を伺へば自歸の處で必定に入るとのたまふが故に、此自歸とは上の念我をさす、何となれば偈に云云するが故に上の如し。

問 自歸即入必定とは正因は稱名に非ず信心といふことにて未だ以て不退の見込にならざるべし。

答 不然信の一念に不退に至るといふことなり、何となれば次に應時爲現身とのたまふが故に、是れ心念阿彌陀の時正定聚に位するとのたまふなり。

問 本願成就の文を高祖の御取扱は現生なれども、若經文直に伺て即得往生住不退轉を十一願成就に合せは彼土不退なり、然らば乃至一念とのたまふて已に彼土不退とも取得るに非ずや。

答 若彼土不退とせば元祖の如く行一念とす、若信一念とせば

信樂開發の時尅の極促を顯はすが故に、即得不退は現生なること明なり。

問 註に信佛因縁とのたまひながら彼土不退とす如何。

答 彼の信佛因縁は願生淨土の果に向ふて不退に向はず、不退は彼土に生じて佛力住持して大乘正定聚に入るとのたまふ、今と異なり。

問 若稱名で不退に至るとせば彼土なるべし、已以上の略答に稱名で不退に至るとするもの如何するや、若稱名に約すれども尙は此土とせば其稱名は第一聲を取るや、若盡形壽の稱名とせば彼土なるべし如何。

答 稱名の方で不退に至るとも此土なり、何となれば一聲の稱名が皆不退を得るが故に。尙は一念一無上功德十念十無上功德

といふが如し。

次に彼土不退の義を含蓄すとは、鸞師之を取り以て彼土とせたまふ、然らば今論の上其義なくんはあるべからず、何を以て其義あるを知る、曰く彼の難行道所期の不退は顯益なり、今現生不退は密益なり、此密益を以て彼の顯益に對するに彼何ぞ之を意とせん、故に彼の顯益に對せば是も亦顯益に約せずんはあるべからず、此意を以て偈を伺ふに正く彼の淨土の果相を顯はしたまふと雖も、或は超出三界獄或は彼土諸菩薩等とのたまへるもの全く彼土不退を顯はしたまへたものなり可知。

十四 本 求 佛 道

科 解

○元疏云、本求佛道者、正指百劫修相好時……應前後文故、千輪白毫

○探玄記、解釋相好有八門、今是修時行諸奇妙事者、應彼當出因積成、四經を指して諸經所説といふ

○共行品云、於諸所尊、迎送恭敬、乃供給人使、放得手足輪相、又云供養和尙、乃兄弟所尊重、善能衛護、故得自毫莊嚴面相、云觀佛經云、白毫光明衆相具足、諸修多羅中佛已廣説、云

元 ○本求佛道時、指百福修相、探玄記八門、修時是共行品の文に依る、是

○行諸奇妙事、指出因積成、二

○如諸經所説、指觀佛、一、無上依、二、百福相、三、百福莊嚴經、四、等、

探玄記に善生經、楞伽經、如來藏經、大集經を出す、

本 求 佛 道

共行品の如き華嚴に一別を帶る行布の方にて帶權の邊に約するならん^二是

彌陀修相百劫の相を説くの經文を見ざるが故に^三是
上の二報を承くる何ぞ千輪白毫のみを承るといふや^四是

註上如性功德^一

○螢明錄云明教院云承上二德明依正相於此明其因行又承前如來

經に不生慾覺等の行を修す

二不思議也

超諸天人乃至而得自在を云ふ

妙相讚其因行奇妙事者甚難爲奇希有爲妙乃名最難事如諸經者有^二義一如諸經所説一切菩薩修行^二彌陀因行如諸經所説

雲棲小經疏三之一引七經大經會疏四下出十六種

○本求佛道有二義^一

空

- 承前二報故
- 示彌陀因行故
- 無彌陀修相故
- 應彌陀因行經説

一修相義

- 一承千輪白毫文故
- 二合探玄記故
- 三合共行品故
- 四應後二句故
- 一承前二報故
- 二云佛道故
- 三修相百劫小權所談故
- 四彌陀修相の因行無が故
- 五餘經因行説多が故

一永劫行

釋義

古來或説に本求佛道時とは百劫修行の時をいふ行諸奇妙事と

本求佛道

は其行といふを指す、是は諸經に出で、あるといふて、如諸經所説とのたまふたものなり、所以は如何、曰く佛道の因は三祇に於て之を成ず、百劫に於て相好を得るの行を修する、今は上の佛足千輻輪乃眉間白毫光等の文を受て、本求佛道時とのたまふたものなる故に百劫修相なり、已に今論共行品の手足千輻輪眉間白毫を得るの法を説く、上の眉間白毫と下の佛足千輻輪と最上最下を擧げて中間を略したるものなりと。

今日然らば、是は法藏因時發心値佛を指す、五劫思惟及び兆載永劫は菩薩無量の徳行を積植するの時なり、行諸奇妙事とは一一の行事皆は不思議なることを顯はしたるものなり、何を以て知とならば註上性功德の文に「法藏菩薩於世自在王佛所悟無生法忍乃發四十八願修起此土等とのたまふが故に」一又今文直に伺ふに其土具

嚴飾等と上の二徳を結んだ文を擧て、本求佛道時と因行を顯はしたまふものなるが故に、是何ぞ佛足千輻輪の文を承くるといふや、二又曰く三祇に佛因を成ト百劫に相好を得るの行を修するといふは小乗及權大乘の説、今何ぞ之を用て解するや、共行品の如きは華嚴は圓に一別を帶ふる行布の方で權大に約して之をいふたものならん、三又諸經中に未だ百劫に於て相好を得るの行を修するといふことを説かざるが故に、四又有人の説の如くならば本求相好時といふべし、今は然らず註上の性功德に「大慈悲是佛道正因故」等と同ト、五明に知る本求佛道とは法藏菩薩五劫永劫の因行を指したまふことを。

十五 乘彼八道

科解

○此偈明二利圓滿故別途

○據大經故

自度 會當成佛道(利)
廣濟生死流(他利)

亦度彼難度海

○合無量德故

○合水道船故 通即別行

○合小經八聖道故

○約本本願弘誓の船のみぞ

○乘彼とは顯他力故 ○約果名號本典の大船是なり

○約因行故八聖道とする

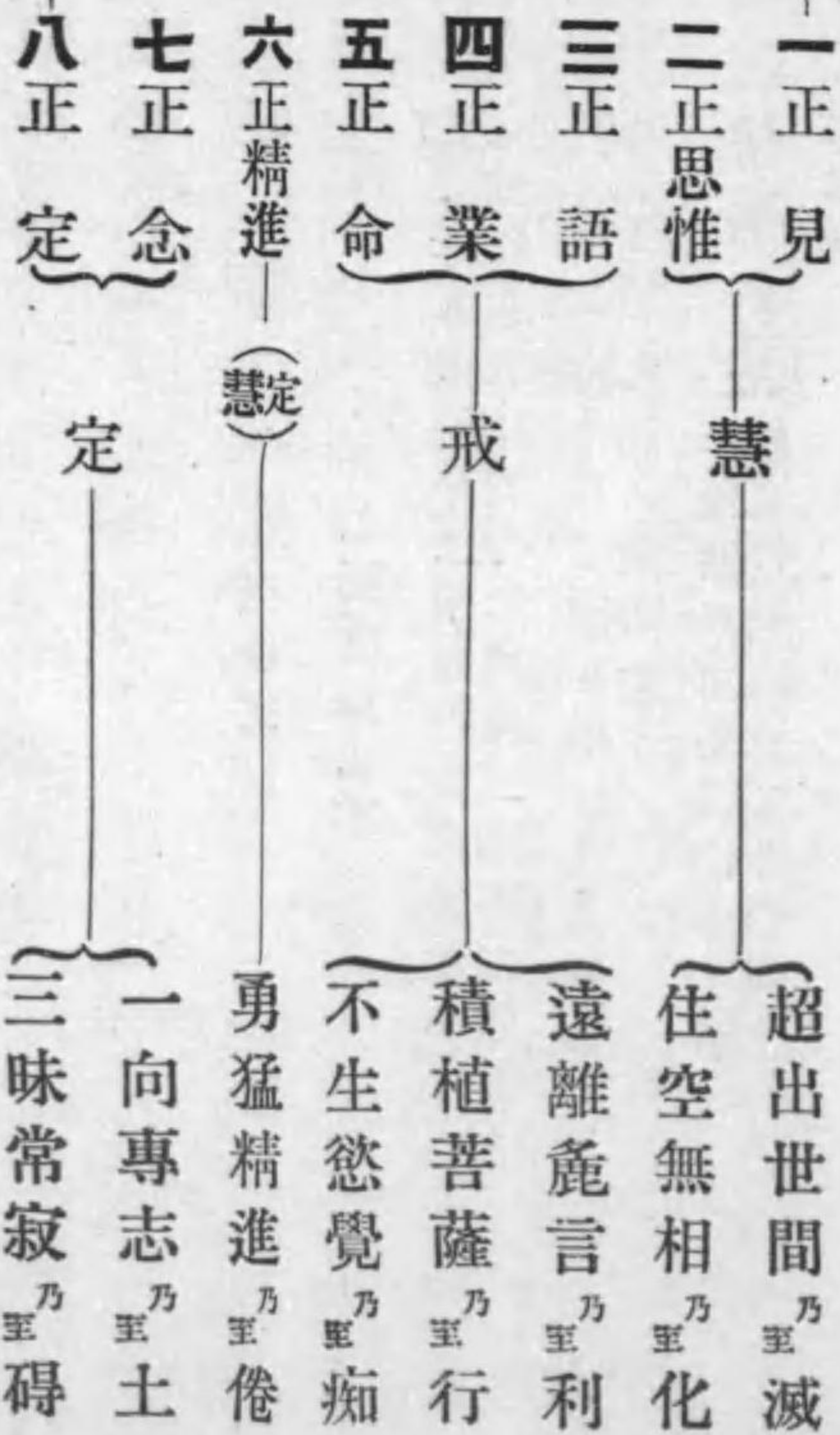
乘彼—船彌陀因行

自度々彼二利圓滿

能度難度海彌陀成佛果

約廣
一約自利故
二約行故

八聖道



乘彼八道

○二利圓滿

- 一 約佛暫聞
- 二 約衆生

- 一 能乘所乘自他に別つが故例餘文
- 二 應序品故八聖道と十地と合し難度海も亦合す
- 三 向對判門故彼は爲本願船今は爲因行彼は爲願本今は爲行末彼は別今は通此三則不二なり
- 四 八聖道應因行段故因にして而も果に及ぶ猶し本願の船の如し
- 五 奪難行簡諸佛易行故十地難行即易行に攝す諸佛易行別時意なるに對す
- 六 對無量德故彼は果今は因
- 七 和讚等の指南に依るが故

釋義

乘彼八道等とは有説に佛に約す、彼八道船とは因位の萬行、乘と

は法藏菩薩の乘したまふこと、能度難度海とは彌陀成佛の果をいふ、自度亦度彼とは二利圓滿の果なることを示す、然るに自の行に自ら乗るといふは如何といふに法事讚に「從上海德^乃乘弘誓觀悲智雙行」とのたまふを以て可知と。

今之を伺ふに然らず、能乘所乘自他に分つが故に、曰く上の大判門及び序品の乗船の喩已に自他に分つ、今の八道とは序品の十地に合し難度海亦彼に出たり、然るに今何ぞ彼と異なるの理あらん、法事讚の文を以て證すれども彼文已に口傳鈔に引て彌陀の弘誓と釋したまふ、然らば自他に分別すること明なり、是を以て可知彼の八道の船に乗するは衆生が乗することを、然らば八道船に乗るとは如何といふに、名號法に乗することを因行よりいふたものにして、因より本願力に乗するといふが如し、彼の本願は果迄に及ん

であるの因の本願、今も亦然り、廣に約して八道の船といふ、是因位の
 の萬行を攝す、八聖道に萬行を攝するの例は涅槃經に「雖道無量要
 唯八聖」と説きたまふ、又大經因行段に合するに此の八聖道にて盡
 る、然らば一切萬行を八道に攝していふたものなり、如是八道船に
 乗すとのたまへども乗するは名號法なり、斯くのたまふは萬行を
 以て一の名號に成就して其名號大行に乗して二利圓滿の妙果を
 開く、其趣は上に信方便といひ自歸入必定或は人能念是佛等との
 たまふを以て可知、然るに上の大判二門の處の乗船の喩は本願を
 船に喩へたもの、阿彌陀佛本願如是に應ずるが故に、今は因行を喩
 ふ、彼は略に約し今は廣に約す、彼は本願に約し今は行末に約す、彼
 は別に約し今は通に約す、然れども更に別なり、共に名號大行の獨
 用を顯はす、然らば本願といふべし殊に八聖道の因行に約するも

の如何といふに、曰く彼難行を奪はん爲の故に序品に隨愛の凡夫
 をして生死の大海を超度せしめんが爲の十地の法を説く、然らば
 二乗の法を説くは如何と夫を答へて共利の大道を得しめん爲の
 故にと云す、然るに彼の十地の法は行諸難行久乃可得にして唯此
 の八道の船ありて難度海を度し二利成就せしむと、彼の萬行を十
 地の法に攝め廣門に約して云ふ故に今も因行に約してのたまふ
 なり、宜なるかな高祖は讚に序品と今文と取合はして「生死ノ苦海
 ホトリナシ」等とのたまふ、又諸佛易行に簡ぶが故に即ち彼は一行
 限のものなるが故に別時意となる、若一行即一切行とし稱名と
 せば難にして易に非ず、今は萬行を一名號に成就したもののゆへに、
 衆生之を領すれば直ちに不退に至るを得ると彼に簡はんが爲に
 因行の方を示したまふたるなり。

十六 華開見佛

科解

顯報土果

對信心情淨者之因故

對疑則華不開故

問 化土に華開なきや。

答

○一義化土皆含華也

〔觀經九品含華故、下三品の三障を大經を以て釋するが故、和讃に「ハナハスナハチヒラケテバ」等とあるが故、

○一義化土不_ニ一定業因千差故

〔所說種々あれども惣因別果の說なるべし、御文章の「コノ信決定セスハ無間地獄ニ墮在スベキモノナリ」とあるに例すべし、

○大經に含華なきが故

○上々品含華なきが故

○定善義の地觀の釋含華に局らざるが故、

○和讃に含華未出ノヒトモアリとのたまへるが故、

〔未出にあらざる人もあるに對す

問 華開といは、眞土にも含華あるに似たり。

答 來迎の華なるが故、要集に初開樂を明したまふが故、

釋義

華開則見佛とのたまふたは報土の果を顯はすなり、何となれば信心清淨者の因に對し疑則華不開に對するが故に、然らば開華は報土にして化土は悉く含華といふや、有人は化土は悉く含華なりといふ、今伺ふに然らず、何となれば高祖は眞佛土卷終に「假佛土業因千差土復應千差」とのたまふ、明に知る諸經化土の相を種々に説

く、是れ土を見ること千差なるが故に、名は一機の所見に付て化土の相を誡めたものなり、疑惑は是れ化土の惣因なれども華不開は一機の所見を惣因別果してのたまふものなり、寶章に云云するが如し。已に大經に五百歳の間不見聞三寶といふことは一機の所見なるべし、化土は悉く五百歳其咎を蒙るの理なり、高祖は年歲却數ヲフルトトクとのたまふ、五百歳は已に一機の所見とすれば或は含華ともいひ、或は邊界、或は胎生といふものも亦一機の所見なるべし、然らば大經に含華なきは化土悉く含華に非るが故なり、上々品亦然り、定善義地觀の釋含華に局らざるが故に、

因に大悲菩薩入華開三昧といふを以て、上に含華と邊界と胎生と説くといへども、眞土に至るの相を一開華とするが故に化土悉く含華と云今日不然深自悔責して報土に至るの相種々あ

れども上に三を擧ぐる初に就て開華の一を擧て餘を略す、故に或の字を安す、又解す上と同く或といふが故に觀經開華已後の化土の相をいふたものなり、又和讃に「含華未出ノヒトモアリ或生邊地トキラヒツツ」のたまふが故に。

問 善導は下三品の含華を大經の三障を以て釋したまふが故に大經の胎生と觀經の含華と同なるべし、(是)如來會に含華を説くが故に正依大經になきは文略なるべし、(是)讚にハナハスナハナヒラケチバ胎ニ處スルニマトヘタリとのたまふが故に胎生は含華を喩たものなるべし、(是)如何。

答 不然先善導の釋は強ちに大經と觀經と同なるが故に之を釋したまふに非ず、共に不見三寶の故に釋したまふものなり、(是會)又梵本多含の故に如來會は含華の方で譯す、正依經は胎生の方で

譯す、(是會)又讚は如來會の文に依りたるものなり、如來會に「雖生彼國於蓮華中」乃處華胎中猶如園苑宮殿之想とのたまふに依る、如來會では含華を胎に處するに喩ふ、正依經では不見三寶を胎生と喩ふたものにて可知、然らば今も信疑得失を明すが故に大經に依たものなり、然れども元龍祖は梵本に依りたまふものなれば本經と同一多含なりしものが譯者含華の方で譯したものなるべし。

問 上品に含華なしと雖も己に十一門科の第十に「明到彼華開遲疾不同」といへば、上々品は文略なるべし。

答 不然彼の華開遲疾とは含華をいふに非ず、臨終の時持ち來りたまへし蓮華の開くに遲疾ありて、疾く聞くものは含華に非ず、其花の開かざるものが含華なり、其含華にも亦遲疾あり經に説くが如し、併し來迎の時の蓮華に包まれて行くことは化土生に限ら

ず報土に生ずるものも亦然り、故に今も華開則見佛とは是含華といふに非ず、即ち要集に蓮華初開樂とあると同なり、是を以て知る十一門科の中第十に華開の遲疾を明すとて九品皆含華といふに非ず可思。

大正五年五月二十二日印刷
大正五年五月二十九日發行

定價金壹圓拾錢

不許
複製

編纂者 鈴木啓基

發行者 松田善六

京都市油小路通花屋町上ル
西若松町十七番戶

印刷者 井出時秀

京都市木津屋橋通堀川東入

發行所

振替 東京四二一五
大阪三三四九

京都市油小路通花屋町上ル
顯道書院

電話下二八八六番

324
495

2

終